

版五十正修

平彌田吉

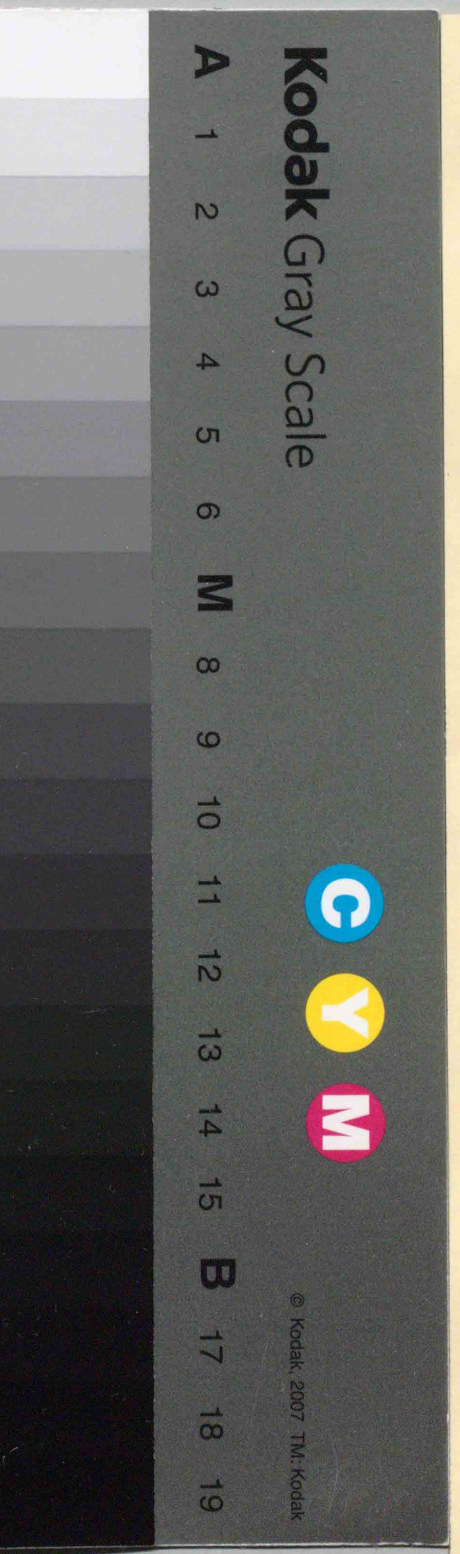
編

學中

國文教科書卷八

京東
版藏館風光

教科書文庫
4
810
41-1923
2000302016



41782

教科書文庫

4
810
41-1923
200030 2016



教科書文庫

4

810

41-1923

2000302016

資料室

375.9
Y019

文部省檢定

大正二十一年十一月十六日 中國語教科書

中國文教科書

吉田彌平編

東京 光風館藏版

Mrs. Y. YOSHIMIZU

広島大学図書

2000302016



東京 廣島大學圖書印



吉田平

中國文教科書卷八

目次

一 物の初	幸田露伴	一頁
二 文學と氣品	芳賀矢一	六
三 箱根路		一四
四 文覺と頼朝その一		一七
五 文覺と頼朝その二		三
六 田舎漢	徳富蘇峰	元
七 霧の倫敦	夏目漱石	三

目次

一

八 秋の力……………	網島梁川	四〇
九 小品三章……………		四四
一〇 長柄堤の訣別……………	坪内逍遙	四六
一一 水無瀬殿……………		五九
一二 比良の山風……………		六二
一三 歌人西行……………	藤岡作太郎	六五
一四 懈怠心……………	兼好法師	七五
一五 四時のあはれ……………	兼好法師	七五
一六 自然と色彩その一……………	松本亦太郎	八〇
一七 自然と色彩その二……………	松本亦太郎	八七
一八 鎮西八郎……………		九四

一九 狐塚……………		一〇二
二〇 鎌倉室町時代の文學……………		一一二
二一 日野の假庵……………	鴨長明	一一三
二二 千客萬來……………		一二八
二三 福澤先生を悼むその一……………	島田三郎	一三九
二四 福澤先生を悼むその二……………	島田三郎	一三五
二五 死と永生……………	高山樗牛	一四六

勇める眼の中の勢もこのもしや。
雲の扉裂けて金光迸り騰り、紅盤焰旋りて瑪瑙爛る、太陽のさし昇りたる、日の出づる初の景色は、春と云はず冬といはず爽かなり。

樹影沈んで夕の水濶く、暮靄地に這ひて人の語静まる時、白玉潤を含んで大いなること車輪の如き月の、薄縹の天にそつと出でたる、其の初の涼しき心地は、之を何にか喩へん。
潮の初も亦面白し。濱の沙固うして礫や、乾き、汐木小白みて寄藻香を放つ干潮の極みに、沖の方漸く膨れて、さし潮の風に乗り來り、一分々に沙を蝕ひ、礫を呑み、潮泡渚に搖ぎて豆蟹勇み奔り、海鷗天に舞ひて時に濤の頭に下り、寄藻

汐木のぬれく、て動かんとする折、邊波にまろぶ貝殻も艶やかに、磯石未だものいはず、濤猶怒らねど、やがては澎湃鏗鞳の響震天撼地の勢をなして、龍王が無字の大經卷を巻いて、又舒べて、千古萬古人間に其の讀まんことを逼る日々の、凄じき業を繰返さんとする意を示せる、何とも云へず壯なる状含まる。

天に挺んでては白雲を駐め、日を蔽うては山逕を青むる喬樹の、其の初、杉も檜もひよろくとして、松も櫟もなよやかなるをかしさ。雨の膏には怡悅の目を張りて笑み、風の管には悲哀の聲を潤ませて戦けど、其の中に不屈の意氣を保ちて、雪虐ぐれども偃して復起き、霜辱むれども萎けて再び

振ひ、日の父の光を慕ふ孝子の情誠に月の母の露に甘ゆる少女の思やさしく、上に向ひ上に向ひ、自ら貞しうし自ら貞しうして、終に其の生を遂げんとする勢ある、孔孟出でざるも道こゝに啓かれたりといふべし。

菽の初、菘の初、かはゆき甲拆の姿のしをらしや。地壓すれば芽ざさんとして芽ざし難きまゝ伸びんとして屯り、身を屈めて一力入れ、根入漸く足りて辛うじて世に出でたる、嫩青微緑柔かにして夢を結べる如き、さはらば消えんおぼつかなさの二葉に籠れる力こそめでたけれ。

禽の初の卵殻の中においてひくと鳴きたる、啐啄事了りて綿毛に風の當りたる、皆あはれに勇まし。彼の聲には嶰竹

裂けんとし、石破れんとする韻を藏し、此の姿には鐵翻颯を截りて崑崙を凌ぐ威を具ふ。魚は苗にして江湖に遊ばんとし、蛇は寸にして藪澤に傲る。仔駒の生れて眼の色だに定かならぬに、四蹄はやくも軽く草の煙を蹴て母馬に追ひつき、其の乳を立飲したる、あどなくして而も至健の徳をあらはす。獅子の兒の怒毛もまだ硬からぬに、千尺の崖より墜されて巉巖の下に膽を張り爪を張りたる、流石に仰いで親の姿の霞に遠きを見ては、兒心の遺瀨なき思もすらんを、獸王の血統とて女々しからぬも尊し。

よろづのものを観るに、其の初みな美はしく好し。人の子の生るゝや悪相なしと聞く。物みな始有り、願ふところは

其の始有る所以を遂げんことなるのみ。(洗心録)

芳賀矢一
國文學者
文學博士
東京帝國大學名譽教授
國學院大學長
慶應三年(二三七)生

二 文學と氣品

芳賀 矢一

月明かに
魏ノ曹操ノ短歌
行ニ「月明星希
烏鶴南飛」
サンスシイ宮
伯林ノ附近ボツ
ダムニ在ル

文學といふものは、國家から見れば、國民精神の宿る所で、個人から見れば、高尚な氣品の流露である。立派な文學のある國は其の國の品格も一段と高く見え、文學の嗜がある偉人は一入懐かしい心持がする。魏の曹操は其の事功の上から見ては、あまり好かれぬ人物であるが、槊を横たへて「月明かに星希に」と歌つた一事を想ひ出すと、何となく慕はしくなつて來る。普魯西のフレデリック大王は賢君として名高い王様であるが、其のサンスシイ宮の中に佛國の文豪

格のたてはほこ
山櫻かな
衣のたてはほこ
だれの苦しきに
衣のたてはほこ
るびにけり
しひを拾ひて
登るべき便なき
身は木の下にし
ひを拾ひて世を
渡るかな
弓張月の
時鳥名をも雲井
にあぐるかな弓
張月のいるに任
せて
埋木の
埋木の花さくこ
ともなかりしに
みのなる果ぞか
なしかりける

道もせに
吹く風をなこそ
の關とおもへど
も道もせに散る
山櫻かな
衣のたてはほこ
年をへし絲のみ
だれの苦しきに
衣のたてはほこ
るびにけり
しひを拾ひて
登るべき便なき
身は木の下にし
ひを拾ひて世を
渡るかな
弓張月の
時鳥名をも雲井
にあぐるかな弓
張月のいるに任
せて
埋木の
埋木の花さくこ
ともなかりしに
みのなる果ぞか
なしかりける

と交つて、靜かに文學に耽られた事を考へると、尙更貴い感じを起す。英雄閑日月ありといふ語がしみと身に染みて景慕の念を生ずる。源頼光や頼信よりも八幡太郎義家の方がえらく思はれるのは、勿來關に馬を停めて「道もせに散る山櫻かな」と詠んだ風流、衣川に矢を番つて「衣のたてはほこるびにけり」と呼止めた情致がある爲で、これは其の後の爲義にも爲朝にも義朝義平にも眞似の出來ぬところ。源三位頼政の「しひを拾ひて世を渡るかな」はあまり感心せぬが、「弓張月のいるに任せて」埋木の花さくこともなかりしに。などの韻事があつた爲に、後世にまでその名が高くなつたのであらう。小楠公

假の契を
とても世になが
らふべくもあら
ぬ身の假のちぎ
りをいかで結ば
ん

梓弓

歸らじとかねて
思へば梓弓なき
數に在る名をぞ
とむる

波ばかりこそ

有明の月もあか
しの浦風に波ば
かりこそよると
見えしか

筆蹟

君がため神のめ
ぐみのあづさゆ
み矢をよろづ世
のすゑもたのも
し

陸奥の

陸奥のいはでし
のぶはえぞ知ら
ぬ書きつくして
よ雷のいしぶみ

をして一層美的ならしめるのは、假の契をいかで結ばんの歌と、梓弓無き數に在るの辭世とである。平忠盛に波ばかりこそよると見えしかの風流があつて、眇の俄殿上人も優にやさしい感じを與へる。これは淨海入道の及ぶ所では

君のききぬのうそにありさぬ
えをくらげのすきとあり

源赤
實松
朝香
筆雨
續藏

無い。頼朝の陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬをおもへば、義経や範頼を殺す程の人とは思はれぬ。西行法師との談話にも幾分の風流譚が交つて居たらうと想像される。其の子實朝に至つては更に歌の名手。これは源氏の武將

中の第一で、曩祖八幡太郎の文學的方面はこゝに最大の發達を遂げて居る。頼朝の覇業は三代で亡びたが、實朝の文學は千古不朽である。文學者の文學は當然であるが、政治家なり武人なり他の方面の人で風流譚のあるのは、非常に其の人品を高くするもので、時には其の人の闕點まで掩ふやうな心持がする。實朝が源氏の末路を飾ると同じやうに、平家の末路を飾るものは薩摩守忠度である。平家の公達には歌を詠んだ人は澤山あるが、忠度が都落に馬を乗返して俊成卿の門を叩いた一話は、最も美はしい永久の語草である。

武士は情を知らなければならぬ、武人として文事の嗜がな

くはならぬとは、武家の家訓として必ず教へた事柄である。武田氏・北條氏・長曾我部氏・加藤氏等の家訓は皆之を歌つて居る。それであるから、戦國時代にも風流の心得のある武人が中々に多い。承久の役に院宣を讀み得る人が無かつたなどといふのは、本當の武士の無かつた證據。北條氏・康毛利元就・太田道灌などは皆和歌風流の嗜が深かつた。豊臣秀吉を無風流の人と思ふのは大間違、吉野の花見には諸大名もそれ〴〵詠歌をものして居る。上杉謙信が「霜滿軍營」の一吟は人をしてまづ之に同情せしめる所以で、其の襟度の遙に武田信玄以上だと思はしめる最大の原因となつて居る。其の家來の直江兼續も文學の素養から其の風

霜滿軍營

霜滿軍營 秋氣清。數行過雁月三更。越山併得能州景。遮莫家鄉憶遠征。

采を想望せしめる。多くの傳説を集め得た源義經や、武將の典型と見られた加藤清正に風流韻事の傳はらないのは何となく物足りない心地がする。梶原景時・明智光秀の時にとつての連歌などが、やゝ其の憎しみを減じさせるのも、

あはれを以て病味必叫知此也
唯自皇天皇后土
其生別

梅田雲濱筆蹟
(維新志士芳帖)

筆蹟
妻臥病牀兒
叫飢。挺身直
欲當戎夷。今
朝死別與生別。
唯有皇天后土
知。

文學のお蔭と謂はねばならぬ。幕末の志士は必ず何物かを口吟んで居る。藤田東湖の回天詩や正氣歌などは其の尤なるもので、梅田雲濱の「妻臥病

伴林光平

勤王家

歌人

元治元年(三三)

歿

年五十二

望東尼

野村望東尼

女流勤王家

慶應三年(三三)

歿

年六十二

筆蹟

山さくら日本こ
ころの清ければ
ちるもひらくも
なつみ無して
望東

牀兒泣飢橋本景岳の始知松柏後凋心。頼三樹三郎の誰題目
本古狂生をはじめ、佐久間象山でも吉田松陰でも僧月照で
も伴林光平でも、乃至は望東尼でも、或は詩に或は歌に、其の

野村望東尼筆蹟
(野村望東尼書畫大觀)

心事は永く其の文學に傳はつて、忘れようとしても忘れられないやうになつて居る。是等の志士は天下の憂に先だつて憂へた人、其の志を繼いだ人々が、却て明治の世には公となり侯となり伯となつて榮爵を辱うしたが、そんな人よ

りも、一篇の詩、一首の歌を留めて國難に斃れた人の方が、千秋萬古人の情緒を動かすであらう。

文學は廣い意味でいへば固より詩歌のみに限らぬ。併し日本では文學の他の方面は從來閑却せられて居つたので、小説や戯曲に意見を吐露したり理想を披瀝したりする事は無かつた。これからはそれも出來よう。政治家でも實業家でも武人でも、後世に名を残さうと思ふ人は、文學に筆を染めることに心掛けるがよい、否々平生から文學に心掛ける程の襟度の人であつて、始めて立派な武人にも政治家にも實業家にもなれるのであらう。余は此の點から故伊藤藤公や乃木大將に一層深い敬意を表せずには居られぬので

ある。(筆のまに)

三箱根路

源 實朝

箱根路をわたりて木が伊豆の海に

おきぬく一平波乃よるまゆ

梶原景季

平のせりて木のおをけりて

おきぬくまに守りて

菊池武時

源實朝

鎌倉三代ノ將

軍

承久元年(二七九)

薨

年二十八

梶原景季

正治二年(二六〇)

歿

年三十九年

菊池武時

南朝ノ忠臣

元弘三年(一九三)

卒

年四十二

蒲生氏郷

會津藩主

天正十六年(三四

〇)卒

年四十

伊達政宗

仙臺藩主

寛永十三年(三三

六)卒

年七十

藤田彪

號ハ東湖

水戸藩士

安政二年(五二五)

歿

年五十

もの物の上矢たふりて

思ふもるもるもるもる

蒲生氏郷

限有もはつりて

うらりりりりりりりり

伊達政宗

さきもももももももも

算のたうはむよりの雪

藤田彪

月照
幕末ノ勤王家
安政五年(五八)
寂
年四十六

誰の心も我々の心も一つの

心も一つしは林の木の如く

月照

〜の心も我々の心も一つの

仲の皮問りしもの如く

伴林光平

跡の山その心も我々の心も

〜の心も我々の心も一つの

平野國臣

平野國臣
幕末ノ勤王家
元治元年(三四)
歿
年四十三トイフ

奈古屋寺
伊豆國韭山ノ附
近ニアル

天のそ吹きよに木の旗の事よ

なみろねさきはあ〜とまおよ

野村望東尼

後衣よ〜の心も我々の心も

〜の心も我々の心も一つの

四 文覺と賴朝 その一

抑、文覺配流の後、籠居したる處をば奈古屋寺といふ。本尊は觀音大悲の靈像なり。効驗無雙の薩埵なりければ、國中の貴賤參詣隙なし。その上、文覺われめでたき相人なり」と

披露しければ、事を御堂詣でによせて、男女多く入り集つて相せらる。向後は知らず、過ぎこし方はつゆ違はず。あり難き相人なり。といふ。

胡馬北風
胡馬依北風
越鳥巢南枝

兵衛佐殿は胡馬北風に嘶え、越鳥南枝に巢くふ習にて、都の人のゆかしさに行きて物語し、身の相をも聞かばやと思召しけれども、人目もいぶせく、機嫌も知らざりければ、思ひながらさてのみ過ぐる程に、文覺が庵室と兵衛佐殿の館とは、むげに近き程なりければ、藤九郎盛長を以て、まづ文覺が弟子に相照といふ僧を招かれけり。即ち参りたれば、佐殿遙に花の都を出されて、かく草深き住居なれば、都の方も戀しかりつるに、何事どもか侍ふと宣ふ。相照、京、白川の有様よ

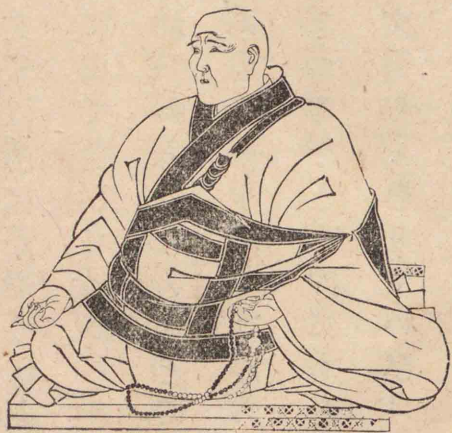
藤九郎
安達盛長

り、藤氏平家前官當職公家仙洞の事に至るまで、はるくと申しけり。

さて、佐殿上人に見參せば、やと相存ず。如何あるべき。と宣へば、相照いと易き事にこそ。庵室へ入りたまふべきか、又召さるべきか。但し物狂の人にて、あしざまにや御目に懸り候はんずらん。その條こそ恐れ入つたれ。と申す。「物狂とは如何にかおはしますやらん」と問ひたまへば、相照、師匠の事にて候へども、うつゝ心なくして、或時は高聲多言にして、旁若無人なり、或時は柔和神妙にして、禪定に入るが如くなり。時雨の空の晴れ曇るやうに、紅葉の秋の濃き淡きが如く、取定めぬ心にて、三尺ばかりなる櫛の杖を數多用意し

て是非なく人を打ち侍る間、弟子ども四五十人もや入り侍りぬらん、あまりに打つほどに、堪へずして皆逃失せて、今は一人も侍らず。この間こそ三十許なる僧の同宿せんとて見え候を、さのみ打ち侍る程に、かの僧腹立して、親は子を育み、師は弟子を憐む習なり。同宿なればとて、咎なき者をおくしもや打つべき。とて、杖を奪ひ取り、上人が頭、血の流るゝ程打返す。上人頭おしさをりて、この法師は神祕ある者なり。法師ほどの者を打返すは只者にあらじ。文覺を打返したれば、わ法師をば覺文といはん。とて、同宿したる者ばかりこそ候へ。大方うつゝ心なき人にて侍り。と申す。佐殿打笑つて、その意を得てこそ見參せめ。と宣へば、相照庵室に

歸りて、この由文覺に語りければ、來たまへかし。といふ。相照又立歸つて佐殿に申せば、盛長を召具して上人が庵室へ渡りたまふ。



文覺上人 (東京帝室博物館蔵)

文覺目も懸けず、詞も出さず、佐殿のおはする處を黒脛かゝげ、上下駄はきて、前へ後へ通ひ行くこと四五遍して後に、障子の内に入つて、頭ばかりを差出して、兩目にては睨み、片目にては睨み、立上りては睨み、さしうつぶきては睨む。佐殿は、今や打つ、今や打つ。如何に打つとも怖へなん。實に堪へがた

下野殿
下野守源義朝

六孫王
清和天皇第六ノ
皇子貞純親王ノ
子經基
清和源氏ノ祖

くば逃げん」と思はれて、面も損ぜず、身もはたらかさず、かき
つくりひて、やゝ久しくおはしけり。
文覺は遙にかやうにため見て、障子をさとあけて、佐殿の前
に出で合ひて、をかしや、御邊は故下野殿の三男とこそ見奉
れ。いとほしく」とて、やがてはらくと泣きて、切つて繼
ぎたるやうに、あながちに畏まつて禮儀しけり。佐殿は聞
きつるごとく、げにも尋常ならず思はれけり。
文覺やゝありていひけるは、法師日本國修行して、在々所々
に六孫王の末葉とて見參するを見るに、大將となつて一天
四海を奉行すべき人なし。或は心勇みて人思ひ附くべか
らず、或は性穩しくして人に威應なし。穩しうして威なき

も身の難なり、勇みて猛きも人の怨なり。されば威應あり
て穩しからんは國の主となるべし。殿を見奉るに、心操穩
しうして威應の相おはします。これはものゝ思ひ附く相
なり。項羽は心奢つて帝位に登らず、高祖は性穩しくして
諸侯を従へたり。御邊は末頼もしき人なり。めでたし」と
歎じたり。兵衛佐これを聞き、壁に耳、石に口。人や聞くら
ん、恐ろしく」と思はれければ、その日は館に歸りたまひぬ

五 文覺と頼朝 その二

その後は、佐殿も忍んで時々通ひたまふ。文覺もまた折々
は參じけり。日來よくく相馴れて、文覺重ねて申しける

小松内府
平重盛

天與
漢ノ翻徹ガ韓信
ニ説イタ語

は、や、佐殿、源平兩家は相互に一天の守護、四海の將軍たり
き。然るに太政入道、一旦の果報に引かれて天下を管領す
れども、惡逆無道にして宿運既に盡きたり。家を繼ぐべか
りし小松内府、日本に相應せず、一門に過分して薨じたまひ
ぬ。その弟ども數多ありと雖も、世を治むべき仁なし。今
は何事か候べき。御邊は大果報の末頼もしき人なり。文
覺相し損じ奉るまじ。法師が目、凡夫の目にあらず、左は大
聖不動、右は孔雀明王の御目なり。人の果報を知り、日本國
を照し見る事、掌の中なり。とくく謀叛を起し、平家を
討ち亡して父の恥をも雪ぎ、又國の主とも成り給へ。漢書
に「天與弗取、反受其咎、時至不行、反受其殃」といふ事あり。運

の開けたまふべき時熟したまへり。沈み過したまふべか
らず、急ぎたまへく。と細々と申す。

兵衛佐殿聞き給ひて、この上人は心際恐ろしき者にて、かく
語らはん程に、左右なく心解けて謀叛をも起さんといは、
頼朝が首を取つて平家にとらせ、己が罪を遁れんと謀るに
もやあるらん。と思はれければ、我が身は勅勘を蒙りたれば、
日月の光に當るだにも憚あり。池殿の尼御前に身を助け
られ奉りて、保ち難かりし命の今までながらふるも、しかし
ながらかれの御恩なり。さればいかでか弓矢を取つて平
家に向ひ侍るべき。又世の末に左様の腹黒などあらせじ
料に、國に下り着きなば、狩漁すべからず、人の爲に慈悲ある

三途
火途(地獄道)
刀途(餓鬼道)
血途(畜生道)

べし、不用の名立つべからず、事に於て穩便にして、經を讀み佛を唱へて父の菩提をも弔ひ、わが後生をもたすかるべしなど、さしも仰を蒙り侍りき。實に榮華榮耀に誇るとも、一期の作法程なし。意執我執を存ぜん事、三途の苦惱遁れがたし。然るべき善知識の仰と思ひ取り侍りしかば、毎日に法華經二部轉讀して、父母親屬、殊には池の尼御前の菩提を弔ひ奉るより外は、營む事候はず。惡事など思ひ寄らざる事なり。と宣へば、文覺懷より白き布袋の少し舊りたるに裹みたるものを取出して、やゝ佐殿。これこそ故下野殿の御首よ。法師獄定せられたりし時、世に立ち廻らば奉らんとて盗みたりき。赦免の後はこのかしこに隠したりしを、伊

豆の國へ流さるべしと聞きしかば、定めて見參し奉らんずらん。さては進らせん。とて、頸に懸けて下りたりき。口頃



源頼朝 (山城國高野神護寺藏)

ふべき事にや。とあはれにこそ候へ。それ進らせん。とて、はらはらと泣きけり。

兵衛佐殿これを見たまひて、一定とは知らざれども、父の首と聞くよりいつしかなつかしく思ひつゝ、泣く泣くこれを請取つて、袋の中より取出して見たまへば、されたる頭なり。膝の上にかきすゑ奉りて、やゝ久しくぞ泣きたまふ。この下野守には子息あまたおはし、中に、兵衛佐を鬼武者とて、十ばかりまでも膝の上にするて愛したまひし志の報にや、今はその骸を請取つて、膝の上に置き奉つて、なつかしく覺ゆ。その後ぞ深く合體したまひける。「意合則胡越爲昆弟、由余子臧是也。不合則骨肉爲讐敵、朱象管蔡是也。只志を朋とせり、必ずしも親を朋とせず」とぞ、文覺常には申しける。

(源平盛衰記)

由余・子臧
秦用我人由余
而翻中國齊用
越人子臧而疆
威宣。

徳富蘇峰

名ハ猪一郎
國民新聞社長
貴族院議員
文久三年(一八五三)
生

六 田舎漢

徳富蘇峰

人の常に愛好するは庭前の花木なり。然れども大廈高樓を建築せんと欲すれば、深山幽谷の檜杉を用ひざるべからず。養ふ所のものは用ふる所のものに非ず、用ふる所のものは養ふ所のものに非ず。韓非子の語豈我を欺かんや。人の常に輕蔑するは田舎漢なり。彼、武骨なり、木強なり、王侯貴人の爲に悦ばれざるなり、貴女の爲に愛せられざるなり。彼は小説の世界に於てすら、最賔少き人物なり。況や現實の交際社會に於てをや。一杯の葡萄酒も彼の爲に酌む者あらざるなり、一片の笑渦も彼の爲に獻ずる者あらざ

るなり。彼又時として交際社會に出づることあり。されど、其の出づるや頑石の庭中に横たはりたるが如きのみ。何人も之を顧みる者なし。然れども天下一度事あるに當りては、往々此の頑石を用ふることあり、又用ひざるべからざることあり。

英國の革命あるに際してや、其の解難排紛の衝に當り、以て最後の戦勝者たりし者は誰ぞや。オリヴァー、クロンウェルにあらざや。彼、何人ぞ。史の記する所に據れば、彼は實に武骨なる田舎漢にてありき。彼の反對黨某は其の日記に書して曰く、「一千六百四十年十一月、余は國會の一員として議事堂に入るや、竊に謂へらく、「此の裡にある人士は風流

クロンウェル
英國ノ政治家
(1599—1658)

閑雅優美、斌媚の紳士ならんと。』豈圖らんや、今一人の起立して演説する者あり、余は其の何人たることを識らず。彼は甚だ質朴なる容體にて、田舎の仕立屋が裁縫せりと思しき不體裁の衣服を着したり。而して其の羅紗さへも粗惡に且垢つきたるが如きを見たり。余は猶之を記憶す、彼の襟には殆ど彼の頬にある黒子程の汚點染み居たり。彼は帽を被れり。然れども其の帽には紐を附けざりしなり。彼の體格は尋常一様にして、長劍をば身邊に横たへたり。而して其の顔面肥えて、また赤きこと火の如し。其の聲たるや最も鋭くして、且調子悪しく、其の演説も要するに只熱心を以て溢れたる者にして、理窟らしきこと更に見えず。

余は滿堂の議員が斯の如き人の演説に耳を敬て、謹聽するが如き模様を見て、國會の價値も亦是程かと思ひ、始めて國會を尊敬せざる心を生じたり。と。是實にオリヴァー、クロンウェルなり。彼は實に斯の如き人にてありしなり。而して英國革命の大戦場に於て勝を制したる者は彼の風流自ら悦び、嫵媚自ら誇り、夜光の杯を傾け、珊瑚の鞭を揮へる王權黨の騎士にあらずして、却て此の田舎漢及び此の田舎漢を戴く數多の田舎漢たる短髮黨たりしなり。維新の革命に際して、其の戦勝者たる月桂冠は何人の頭上に屬せしか。彼の閑雅優美なる公卿大名若しくは月代狭くして黒髮漆の如く金銀作りの太刀を着けたる徳川武士

にあらずして、却て寒山霜を踏んで狡兔を追ひ、茅屋に月を帯びて夜書を讀む所の西郷隆盛及び彼を推戴したる所の薩長武士にあざりしか。

西郷隆盛は固より田舎漢たりしなるべし。彼未だかつて西洋料理を喫する法を知らざりしなり。聞く彼は大口を開き小兒が梨を喫する如く麵包を喫したり。と。彼は實にかくの如き人たりしなり。然り、かくの如しと雖も、毫も其の一世の元勳たるに差支へざりしなり。

田舎漢は何が故にかくの如く天下の大事を負擔するに堪ふるか。彼爲すべき所を知らばなり、彼爲すべき所を行へばなり、彼道行に頓着せざればなり、彼直截なればなり、眞摯

なればなり、一氣奔注すればなり、堅忍不拔なればなり、紛々たる邪念俗慮の彼を煩すものなければなり、失敗を恐れざればなり、成功に満足せざればなり。

彼の容貌風采は粗硬なり、野鄙なりと雖も、其の光々明々たる精神は之を透して美絶清絶壯絶たらずんばあらざるなり。吾人はかくの如き人を以て單に田舎漢とは謂はず、然れども之を以て理想的の田舎漢と謂ふ。(静思餘録)

夏目漱石

名ハ金之助

英文學者

小説家

大正五年歿

年五十

七 霧の倫敦

夏目漱石

昨夜は夜一夜枕もとで、ばちく云ふ響を聞いた。これは近處にある大停車場のためである。この停車場には、一日

のうちに、汽車が千幾つか集つて来る、それを細かに割付けて見ると、一分に一列車位づつ出入をする譯になる。其の各列車が霧の深い時には、停車場間際へ來ると、何かの仕掛で、爆竹の様な音を立て、相圖をする。信號の燈光は、青でも赤でも全く役に立たない程暗くなるからである。

寢臺を這下りて、北窓の日蔽を捲きあげて、そとを見下すと、そとは一面にぼうとしてゐる。下の庭は、芝生の底から、三方煉瓦の塀に圍はれた、一間餘の高さに至るまで、何も見えない。たゞ空しいものが一杯詰つてゐる。さうしてそれがしんとして凍つてゐる。隣の庭も其の通りである。此の庭には綺麗な芝庭があつて、春先の暖い時分になると、白

い髻をはやしたお爺さんが、日向ぼつこをしに出て来る。このお爺さんは、何時でも、右の手に鸚鵡をとまらせてゐる。さうして自分の目を鸚鵡の嘴でつゝかれさうな位に近く鳥の傍へ持つて行く。鸚鵡は羽搏きをして、しきりに鳴きたてる。お爺さんの出ない時は、娘が長い裾を曳いて、斷間なく芝刈器械を芝庭の上に轉がしてゐる。この庭も今は全く霧に埋まつて、荒れはてた自分の下宿の庭と何の境もなくのべつに續いてゐる。

裏通を隔て、向側に高いゴシック式の教會の塔がある。其の塔の、灰色に空を刺す天邊で、何時でも鐘が鳴る、日曜は殊にやかましい。今日は鋭く尖つた頂は無論のこと、切石

を不揃に疊み上げた胴中さへ、ありかゝまるで分らない。それかと思ふ處が心持黒いやうでもあるが、鐘の音はまるで響かない。

表へ出ると二間ばかり先は見える。その二間を行盡すと、また二間ばかり先が見えて来る。世の中が二間四方に縮まつたかと思ふと、歩けば歩く程、新らしい二間四方が現れる。その代り今通つて來た過去の世界は、通るに隨つて消えて行く。

四つ角で馬車を待合せてゐると、鼠色の空氣が切抜かれて、急に眼の前へ馬の首が出た。それなのに、馬車の屋根に居る人は、まだ霧を出切らずにゐる。此方から、霧を冒して飛

乗つて下を見ると、馬の首はもうぼうとしてゐる。馬車が行違ふ時は、行逢つた時だけ、綺麗だなと思ふ。間もなく、色のあるものは濁つた空の中に消えて仕舞ふ。漠々として無色の裏に包まれて行く。ウエストミンスター橋を通る時、白い物が一二度眼を掠めて翻つた。眸を凝して其の行方を視詰めてゐると、封じ込められた大氣の裏に鷗が夢の様に微かに飛んでゐた。其の時、頭の上で、大時計が厳かに十時を打出した。仰ぐと空の中で只音だけがする。

用事をすまして河沿の道を歩いて來ると、今まで鼠色に見えた世界が、突然、四方からばつたり暮れた。泥炭を溶いて濃く身のまはりに流した様に、黒い色に染まつた重い霧が、

目と口と鼻とに逼つて來た。外套は抑へられたかと思ふ程濕つてゐる。薄い葛湯を呼吸するばかりに氣息が詰る。足許は穴藏の底を踏むと同然である。

自分は、此の重苦しい茶褐色の中に、しばらく茫然と佇んだ。自分の傍を、人が大勢通る様な心持がするけれども、肩が觸れあはない限は、果して人が通つてゐるのかどうか疑はしい。其の時、この濛々たる大海の一點が、豆位の大きさに、どんよりと黄色に見えた。自分はそれを目標に、四歩ばかり歩いた。すると、或店先の窓硝子の前へ顔が出た。店の中では瓦斯を點けて居る。中は比較的明かである。人は常の如くにして居る。自分はやつと安心した。

こゝを通り過ぎて、手探りをしないばかりに、向ふの岡へ足を向けたが、岡の上には同じ様な横町が幾筋も並行してゐて、青空の下でも紛れ易い。自分は、向つて左の二つ目を曲つた様な気がした。それから二町程、眞直に歩いた様な心持がした。それから先はまるで分らなくなつた。暗い中にたつた一人立つて首を傾けた。右の方から靴の音が近寄つて來た。と思ふと、それが四五間手前まで來て止つた。夫から段々遠退いて行く。仕舞には全く聞えなくなつた。後はしんとしてゐる。自分は又、暗い中にたつた一人立つて考へた。どうしたら下宿へ歸れるか知らん。(漱石全集)

綱島梁川

名ハ榮一郎

哲學者

宗教家

明治四十年歿

年三十五

八 秋の力

綱島梁川

「あれこれをあつめて霞む春の臚を人生の夢とも見ば、秋は直にこれ覺醒なり、事實なり。 蔦紅葉の中より露れ出づる節くれだちし樹身、枯芝生の底より躍り出づる偃蹇たる雲根、何れか秋は人に迫る事實たらざる。

中にも秋の力を最も強く膽かに言出づるものは黄柚なり、赤柿なり。一美術家語りて曰く、吾嘗て終日秋を郊外に探りて秋に會はず、歸路會、夕空鮮かに結び出でたる赤き柿の實の累々たるを見て、始めて秋こゝにありと叫びき」と。げにも秋の姿をさながらに具象にして描き出せるものありとせば、それは碧落の空に躍如として結び出でたる赤柿を描

蕪村

與謝氏

俳人

畫家

天明三年(一八一三)

歿

年六十八

抱一

酒井氏

畫家

文政十一年(一八二八)

歿

年六十八

きてはまたとあらじ。秋は實に此の累々たる赤柿に其の全幅の表現を得たる趣あるに非ずや。その昔蕪村抱一などの畫家が寥々たる此の一物に大膽なる落想をこめて、一幅の秋のこゝろを勁く隈なく淋漓揮灑し出せる詩眼、流石に凡にはあらざりけり。

見よ、秋の潭に淵黙の智あり、秋の空に剛明の象あり。月は清輝を帯び、星に聲あり。落葉に埋もるゝ枯井の水、なほ鬚眉を鑑すべく、夢を歌ふ滿園の蟲しぐれ、人の深省を誘ふ。

空際ははやかに走る波濤の山、極目鮮かにくねる一河の帶、樹間の聲の錚々として勁き、天籟地籟の碎泝として厲しき、あはれ秋の萬象、何物かすべてこれ透明、照徹、剛克、雄健の一

氣を以て貫かざる、何物かすべてこれ哲人の雄姿、道士の風岸を以て人に迫らざる。秋は夢に非ずして事實なり。人は秋に立つて、直に事實と面相接するなり。

秋は何等の天文、地采の形式を藉らざる裸體のまゝなる思想なり。そは如々なり、故に明瑩なり、澄徹なり、而して又充實なり、豐贍なり。春草の紗、夏木の衣、すべて名殘なく脱ぎすて、あらはなる葛蘿の筋、樹幹の骨、健くもまた雄々しき丈夫神の面影は、げに秋にこそふさはしけれ。若し秋に一味の文采ありとせば、白蘋、紅蓼の裳裾、蘆花、淺水の帶、桔梗、刈萱、尾花が波の袂も、輕き姿なるべし。あはれ其の澹如たるすゞしさは、彼の哲人、道士の婆娑たる一衣の高風にも似た

るかな。至竟秋の力は其の衣にあらずして、赤裸々の事實にあり、思想にあり。(病間録)

九 小品三章

八月五十夜芳宜園にて曇る夜の月を見る

村田 春海

村田春海
國學者
江戸ノ人
文化八年(一四七)
歿
年六十六
芳宜園
加藤千蔭ノ家ノ
雅號
來てふ
月夜よし夜よし
と人に告げやら
ば來てふに似た
り待たずしもあ
らず

芳宜園の月のまといは年ごとのちぎりなれば、來てふにも似ぬ夜のさまなれど、今宵も例の人々詣で來にけり。さるは降りくらしたる雨の名残、霽れゆかん空も覺えず、ましてさやけき光待出でんは、いと心もとなきを、更けゆかば、かくのみにはあらじを。今宵は寢て明してまし。なごいひつゝ、

筆蹟
かはしまによる
かとすれはたち
かへるちとりや
なみとおもふと
ちなる 春海

(觀大畫書) 蹟筆海春田村

伊豫簾空しうかゝげて、
空のみ打守らるゝもい
どわりなしや。今宵は
名に負ふ園生の花もい
たづらに夜の錦にて、淺
茅がもとの松蟲のみ、や
うやう聲そはりゆくも

猶あかぬわさながら、流石にあはれは添へつべし。

晴間なき月を以かに望いひくゝて、

そらふがめにや今宵はかさん。

かきくらす雲間のかげをうとくととせ。

清水濱臣

國學者

江戸ノ人

文政七年(四八四)

歿

年四十九

月まつむしよ、せめて語らへ。(琴後集)

砧を聞く

清水濱臣

近しと聞けば遠し、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむもまたしきる。雁がねの聲の砧をさそふにやあらん、

筆蹟

述懐 後の世に

殘さん名こそか

たからめかくて

はやまし數なら

すとも 濱臣

近しと聞けば遠し、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむもまたしきる。雁がねの聲の砧をさそふにやあらん、

清水濱臣筆蹟
(觀大書)

砧の音の雁がねに通ふにやあらん。あなあやし、あなあやし。そも此の音の悲しきか、住む里のさびしきか、打つをりのうきゆゑか。皆あらず、聞く人の心のさびしきなり。

(泊酒舎集)

中島廣足

國學者

熊本藩士

元治元年(五三)

歿

年七十三

夕

中高廣足

遠山寺の入相の鐘、時に歸る夕鴉もいつしか聲しづまりて、對へる文巻もやうく見えずなりゆくに、心ゆくわたりはいとくちをしきものから、しばし打置きて、はしの方に

筆蹟

玉 明石海神の

こはし、白玉は

あまのをさしそ

かつき出ぬる

廣足

明石海神のこはし、白玉はあまのをさしそかつき出ぬる廣足

中島廣足筆蹟
(觀大書)

れば、暮れのこれる梢どものほのかなる山のはに、はつかにあらはれたる三日月の影こそいとをかしけれ。青鷺とかやいふ鳥の、あやしき聲に鳴きゆくが何となく物淋しげなるを、來んといひつる友は、た暮過してやと思ふも心もとな

きに燈火かゝげたるこそまづ嬉しけれ。(檀園文集)

長柄堤

攝津國西成郡豊
崎村ヲ流レル長
柄川ノ堤

坪内逍遙

名ハ雄藏

英文學者

戯曲作家

文學博士

安政六年(五二九)

生

茨木

攝津國三島郡茨
木町

一〇 長柄堤の訣別

坪内逍遙

晨雞再び鳴いて残月薄く、征馬しきりに嘶いて行人出づ。
はや分れゆく横雲や、残んの星を一つづつ鐘が消し行く
いなめの長柄堤に秋闌けて、一村蘆に風黒く、有明凄き
大川水逝きて歸らぬ浪の音、狹霧に咽び白けゆく千草が
蔭の蟲の聲、哀はいとゞまさるらん。片桐市正且元は居
城茨木へ立退かんと、従ふ郎黨一百餘人、丑の刻に邸を立
つて、大阪城をあとなし、列を正してしづくと長柄堤
に差懸る。(中略)

後には何か一思案、寂然として駒立つる長柄堤の有明が
た、時に囀る小鳥の聲、川霧やうくと晴れゆけば、遠樹模糊
として幹を分ち、ほの見え渡る賤が屋に一筋騰る朝煙、く
たかけの聲勇ましく生氣溢るゝ東の空には似ぬや入る
方の月すさまじき柳陰、枯葉枝疎にして風飄々、見る目も
昏し、遠方におぼろくと現るゝ名におほ阪の四衢八街、
悄然として淋しげに一棟高く聳えしは、

市「おゝ、あれこそはお天守ぢやなあ。南山不落と祝はせら
れ、千萬年の後までもと築かせられし大阪城、故殿下薨れさ
せたまひて後、まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ
離れ、取りわけ加藤肥州逝去の後、思慮ある者には堅節な

く、義勇を存ずる者才略乏しく、阿附黨同して相鬩げば、大政所の御方さへ當家を餘所にみそなはし、浮世離れし御有様唇齒已に亡ぶ。今にもあれ事起らば、金城湯池も其の甲斐なく、

いひかけて聲曇らせ、

市「須彌より重き御遺命、夢聊も忘れざれど、御運の末か、情なや、此の且元がすること爲すこと鴉の嘴とくひちがひ、兩家を繋ぐ絆にもと迎へ奉りし千姫君は東西不和の導火となり、毘盧舍那佛の御胸にも大慈大悲は宿らざるか。御家とこしなへに康かれ。」と祝ひし文字が本となり、降つて涌いたる難題は、只前門の虎にして、後に不慮の豺狼あり。かゝる

千姫君
徳川秀忠ノ女
秀頼ノ室

仕儀となつたること御運の末といひながら、

忪へず馬よりとび下り、彼方に向ひ平伏なし、

市「是しかながら不肖且元愚昧にして先見無く、姑息因循して大事を誤り、空しく關東の罫に罹り、仰せつけられし御遺命に背き奉る今日の仕合せ、不忠とも言ふ甲斐なしとも思召さん。それを思へば、且元が此の腸はちぎるゝばかり、償ひ難き不臣の罪はあの世で御詫仕らん。御赦しなされて下さりませ。」

在すが如く兩手をつき、人目をければ、やゝしばし不覺の涙に暮れけるが、やゝあつて心づき、

市「あゝ、我ながら不覺の至。我が大罪の御詫よりも、差懸る

お家の安危。長門守には如何にせし。心許なきことども
ぢやなあ。

すかしながむる折こそあれ、遙に聞ゆる蹄の音。程もあ
らせず只一騎、残霧つんざき一散に汗馬に中を走り來る
木村長門守重成、

長「市正殿に候な。」市「長門殿待ちかねしぞ。」

いふ間にかけて寄るくつわづら、右手におり立ち顔見合せ、
言葉はなくてそゞろにもまづ袖濡る、朝露や、風飄々た
る枯柳の枝、入りがたの月ゆらめきて老いゆく秋の淋し
さを長柄堤に留むらん。

長「最早豊臣の御社稷も愈末となつたるか。棟梁と頼む足

信
信
人

織田入道
織田信雄常眞入
道
寛永七年 三三〇
薨
年七十三

下まで、佞人讒者の毒舌に逆臣の汚名を受け空しく退身せ
らるゝとは。某圖らぬ事よりして端なくも御母公の御嫌
疑蒙り、出仕を遠慮の其の間に思ひ懸けぬ珍變あり。續い
て足下に御討手と昨朝承り、大いに驚き、すぐにお表へ參入
すれば、城内議論沸くが如く、織田入道殿、日頃に似氣なく激
論の末、席を蹴立て、只今退座ありしとばかり。後は亂脈無
法の評定、御母公の威を笠に被る大野渡邊等が我意暴慢。
此の上は是非に及ばず、彼等を一刀に斬つて捨て、腹かつ切
らんと、二度まで刀の柄に手は懸けしが、貴殿が日頃の教訓
を思ひ出して無念を忍び、無實と知つて忠臣を救ひ得ざり
し言ふ甲斐なさ。

悔むを且元押宥め、

市いしくも堪忍せられしぞや。豫ても屢申せし如く、お家の大仇は彼等にあらざ。鼠輩の爲に命を落すは大忠臣の所爲にあらじ。某とても此の度の一條遺恨骨に徹すと雖も、今更繰返すは愚痴の至。大切なるはお家の後事。某退去の事關東に聞えなば、破綻やぶたれ生ぜんこと治定なるに昨日までは去就きうじゆを定めざりし織田殿、已に心を變じ、京表へ退身せられしからは、城内の祕密悉く漏れ、年來の苦心皆泡沫。大亂破裂せんは目前なり。この上は只偏に籠城の計畫こそ肝要なれ。長しして籠城の計畫とは、何を以て先とすべきか。市されば、今御城に、兵糧、金銀は乏しからず。まつた猛將勇

泡沫

九度山

紀伊國伊都郡ノ

山村

眞田安房守

名ハ昌幸

慶長三年(三三三)

卒

年六十五

卒にも事かゝねど、得難きは智謀の將なり。某之を慮り、萬一の備をなし置きたり。長しして其の智謀の將とは。市いま九度山に隠れ忍ぶ信州上田前の城主眞田安房守が二男左衛門佐幸村こそ故太閤の恩を思ふ智勇兼備の良軍師、關ヶ原の一戰以來關東の跋扈はつごを怒り、蟄ひそして世の態を窺へるを先年御味方となし置いたり。事起らば上使を以ていそぎ彼を招かるべし。合戰の進退は一切彼の人に任せられよ。其の他關ヶ原の一亂以後浪々なせし長曾我部盛親、まつた黒田家の浪人後藤又兵衛基次、何れも得易からぬ良將なるが、豫て因みよみは附け置きたり。上、御使を以て招かせられなば、心を傾け馳せ參ぜん。是、第一の手配なり。

長「してまた籠城となつたる曉敵を防がん手配りは。」市「その儀も豫て地利を考へ、出丸（あがりまわら）なくては叶ふまじと、前年紀州の山々より材木數多伐出させ、商業のためと詐り、紀州川の川上より浪華津に押流させ、御船入りに積み置いたり。まつた港口の御庫には、年頃力めて購ひ置きたる數萬俵の糧米あり。籠城數年に互るとも、なほ支ふるに餘りあるべし。」

長「それに加へて、故殿下が貯へ置かれし數萬の金銀、近年御出費（いりか）嵩むと雖も、尙若干の餘財あり。」市「甲冑兵具も乏しからず。」

長「城は名に負ふ南山不落。」市「眞田・後藤の智勇をもて、此の堅城にたて籠り、忠臣悉く心を一にし、偏に君家を守護するときんば、」

長「たとひ關東の老奸雄、利を略はせ、諸大

社鼠

 患二夫社鼠。熏
 之則恐レ燒三其
 木、灌レ之則恐
 レ敗二其塗。此鼠
 所二以不レ可得
 殺者以レ社故也
 （晏子春秋）

名を懷け、六十餘州の兵を盡し、四方八面より攻めよすとも、」

市「中々三年四年が程には攻落さんこと難かるべし。」

長「まつた若年には候へども、愈軍始りなば、我亦一方を承り、速水御宿（みすみ）和久等と共に忠義を金鐵の堅きに比し、命は固より鴻毛の吹き翻さん白旗は、祖先佐々木が四つ目結、君臣將士心を一にし、千變萬化の手を盡さば、金石も亦透りぬべし。利欲に集る關東勢、なに退くるに難かるべきや。この上は仰に従ひ、この事君に言上なし、直に軍の手配りせん。御心安かれ、市正殿。」

市「ほゝ頼もしゝゝ。只大切は上下の一致、必ず忠勤勵まれよ。とはいひながら、往時（いんじ）に照し、成行く末をかながみれば、」

長「淀の御方の御氣質、社鼠に等しき大

野渡邊。市「上御發明に渡らせらるれど、」長「讒佞之を蔽ふがゆゑ、」市「地の利はあれども人の和なく、」長「故太閤が御威武に、をのゝき震ひ打伏せし六十餘州の民草も、」市「天の時にや、大御所のおのづからなる徳風にいつしか靡く世の有様。」長「如何なれば、かくまでに、御運かたぶく西天の。」市「有明の影薄れつゝ、」長「東天紅と八面に、かしましく鳴くくたかけは、」市「新日、東天に昇るといふ。」長「世の成行の。」二人「影なるか。」

是非もなき世の有様と、入る方の月詠め入り、しばしは愚痴におちかた寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほのぼのと明けにけり。(中略)

二人「さらば〜。」

と西東、見送る方に霧や立つ、眼や曇る、おぼろ〜。嘶く駒の聲はして、立別れゆく兩人が此の世に残す面影は、また見ぬ形とぞなりにける。(桐一葉)

一一 水無瀬殿

建久九年正月十一日、第一の御子四つになり給ふに御位讓り申させ給ひており、給ふ。御年十九。位におはしますこと十五年なりき。今日明日二十ばかりの御齡にて、いとまだしかるべき御事なれども、よろづ處せき御有様よりはなかく、安らかに、御幸など御心のまゝならんとにや。世

建久九年
後鳥羽天皇ハ御
位ヲ土御門天皇
ニ御譲リニナツ
タ

水無瀬
攝津國三島郡島
本村ニアル
澁川ノ右岸登山
城ノ境ニ近イ處

元久
後土御門天皇ノ
御代

をしろしめす事は今も變らねばいとめでたし。

鳥羽殿白河殿なども修理せさせ給ひて常に渡り住ませ給へど、なほまた水無瀬といふ處にえもいはず面白き院づくりにして、しばし通ひおはしましつゝ、春秋の花紅葉につけても、御心ゆくかぎり世をひかして、あそびをのみぞし給ふ。處がらもはるくと川に臨める眺望いと面白くなん。

元久の頃、詩に歌を合せられしにも、とりわきてこそは、
見わたせば山も霞む水無瀬川、

ゆふべは秋とふにおもひけん。

萱葺の廊渡殿などはるくと艶にをかしうせさせ給へり。御前の山より灌落されたる石のたゞずまひ、苔深き深山木

に枝さしかはしたる庭の小松も、げに千代を籠めたる霞の洞なり。
(増鏡)
鳥羽殿の廊渡り
萱葺の廊渡り
御前の山
苔深き深山木

一一 比良の山風

五十首歌奉りし中に

湖上花を 宮内卿

花ささく小比良の山風ふきにそり

こぎゆく船のあと見ゆるまで

五十首歌奉りし時 寂蓮法師

宮内卿
後鳥羽天皇ノ宮
女元曆頃ノ人

寂蓮法師
建仁二年(八六六)
寂

藤岡作太郎

國文學者

文學博士

東京帝國大學文

科大學助教授

明治四十三年歿

年四十一

一三 歌人西行

藤岡作太郎

西行何者ぞ。天涯放浪の行脚僧。その名を一時の名流俊成と齊しくし、鎌倉室町の世、抑歌道に於て定家を難ぜん輩は、冥加もあるべからず、罰を蒙るべきことなり。といはれし時、稱讚の聲又定家に譲らず。近世に至つて定家の價值いたく墜落したれども、山家集の一書は尙如何なる歌人の机邊をも去らず。西行の名今に嘖々たるは、抑何が故ぞ。

西行法師、俗名は佐藤義清、鎮守府將軍藤原秀郷が九世の孫なり。代々武を以て家を立て、義清また勇敢にして弓術を善くす。和歌に堪能なるは蓋しその天稟なり。鳥羽上皇

に仕へて北面の士となり、左兵衛尉に任ぜらる。上皇その才を愛して登庸せんとす。されど、義清は名利を喜ばずして常に厭離の志あり。その出家の動機については、或は傳へて曰く、嘗て同族左衛門尉憲康と同行して鳥羽殿より退出し、明日を期して別る。次の朝、參朝せんとて、約に従ひて憲康を誘へるに、門の邊に人立騒ぎ、内には泣き悲しむ聲聞ゆ。怪しと思ひて尋ねれば、殿は昨夜頓死したまへり。とて、若き妻、老いたる母の重なり伏して歎くに、義清は惕然として遁世の念更に堅し。官を辭して許されざれども、棄恩入無爲は如來の教なりと觀じ、四歳の女が父の歸れるを喜びて取りすがれるを思ひ切りて縁より下に蹴落し、これこそ

此の世の如きは佛に於ては、死すべし。此の世の如きは佛に於ては、死すべし。此の世の如きは佛に於ては、死すべし。

愛着の絆を斷つはじめぞと、顧みもせて家を遁れ出で、嵯峨に至りて剃髮せりと。かくて、名を西行または圓位といふ。出家せるとき保延六年にして、その歳まさに二十三なりきといふ。

西行既に世を遁れて高野に籠り、吉野に隠れ、出でては熊野に參り、伊勢に詣で、鎌倉に下りて右幕下に見參し、進みて奥州に至り、西の方は中國より四國に渡りて大師の靈場を拜み、それより筑紫に遊べり。常に謂へらく「桑門に家なし、抖擻して身を終ふべし」と。一个の笠、一條の杖、草の枕、苔の茵、東西にさすらひ、自然を友とし、悠悠々自適、興至れば則ち和歌を詠ず。高尾の文覺之を惡み、弟子に告げて曰く、「遁世の身

右幕下

右近衛大将源頼朝

大師

弘法大師

高尾

京都府葛野郡高尾山神護寺

筆蹟

四番 左持 雨
中野草 春さめ
のふりそめしよ
りのへ見ればふ
かみとりにもな
りにけるかな
右
しめくといろ
ますあめのふり
そへはふかみと
りなるのへの草
かな

ならば、一筋に佛道修業の外、他事あるべからず。數寄を立て、此處彼處に嘯き歩く條、憎き法師なり。何處にても見あひたらば、頭を打割るべしと。その後、高尾の法華會に行

筆蹟
左持 中野草
春さめのふりそめしよりのへ見ればふかみとりにもなりにけるかな
右
しめくといろますあめのふりそへはふかみとりなるのへの草かな

西行法師筆蹟 (東京帝室博物館藏)

脚の僧の參りあひて花の陰など眺め歩き、坊に來りて一宿を請ふあり。「誰ぞ」と問へば、「西行と申す者」といふ。文覺、手

ぐすねを引き、望の叶ひつる體にて明障子を開けて出づ。暫しまもりて、年頃承り及びたるに、御尋悦びいり候。とて、迎へ入れて饗應に餘念なし。弟子たちはいかなる事の出で來んかと、手に汗を握りたるに、この爲體にて、西行は無事に歸り去りしかば、日頃の仰に違ひたるは、と怪しみ問ふ。文覺答へて、あら、いひがひなの法師どもや。あれは文覺に打たれんずる者の面樣か、文覺をこそ打たんずるものなれ。といへりとぞ。

西行深く花月を愛し、また釋迦入涅槃と契を等しくせんことを思ひて詠じて曰く、

縁がはくは花のもとにて春死さん、

そのきさらぎの望月此ある。

晩年、洛東雙林寺の邊に草庵を結びて閑居せるが、幽契違はず、建久元年二月十六日、七十三歳にして入滅せり。その和歌を集めたるもの即ち山家集なり。

わが國、古來詩人多しといへども、深く自然にあこがれ、山川を無二の友として、生涯の過半を旅行の中に終へしもの、前後僅に三人、西行、宗祇、芭蕉これなり。西行これが先達をなし、宗祇は應仁亂離の折をも厭はず、西行に私淑してその跡を追ひしもの、芭蕉は元祿泰平の機に乗じてまた西行、宗祇が行狀を慕ひしものとす。西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人、おの

西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人、おの

行宮流氷は
浪し雲水に吟嘯せしことを思へば
旅行がいかに詩人の吟
囊を肥すものなるかを知るべし。

おのその道に一期を劃せし三家が、いづれもまた風月に放浪し、雲水に吟嘯せしことを思へば、旅行がいかに詩人の吟囊を肥すものなるかを知るべし。
そもく、平安朝の貴紳淑女は、鴨・桂・二川の流域、數里の間を己が世界とし、海も見ぬ天地に跼蹐して、足、畿外に出でず、一生の經過極めて單調に、感情を刺衝するものなかりければ、従つて思想の發展もある事なし。見聞するところは東山の花、西山の紅葉、いつも同じ京洛の風物より外を知らざれば、詠ずるところの和歌も變化を見ず。子は父に繼ぎ、孫は祖を承けた、同じ詞花言葉を飾るのみにて、累代繼承しゆけば、和歌の思想、辭句の工にも、おのづから典型を生じて、天

眞を忘る。實情を欺き、虚偽に流れ、浮華輕薄徒に形式を飾りて、燦爛たる錦囊、その内容は空しく、滔々として風を成せる時、西行ひとり蹶起して従來踏襲せし典型を簸却し、自ら山水の間に逍遙して直接に自然が隱微の聲を聞き、感得するところは萬朶の花と咲けり。平安朝の末、崇徳院の御製が殊に斷腸の響あるは、その悲惨なる實境を詠じ給へること、世上一般の題詠と選を異にすればなり。わけて西行が歌ふところ一も古人の粉本を摸倣せず、一字一句みな己が肺腑より出づ。數百年の後なほ名聲赫々として天成の大才と許さるゝこと、また宜ならずや。

眞を忘る。實情を欺き、虚偽に流れ、浮華輕薄徒に形式を飾りて、燦爛たる錦囊、その内容は空しく、滔々として風を成せる時、西行ひとり蹶起して従來踏襲せし典型を簸却し、自ら山水の間に逍遙して直接に自然が隱微の聲を聞き、感得するところは萬朶の花と咲けり。平安朝の末、崇徳院の御製が殊に斷腸の響あるは、その悲惨なる實境を詠じ給へること、世上一般の題詠と選を異にすればなり。わけて西行が歌ふところ一も古人の粉本を摸倣せず、一字一句みな己が肺腑より出づ。數百年の後なほ名聲赫々として天成の大才と許さるゝこと、また宜ならずや。
西行既に古來の典型を捨て、直に自然の堂奥に入らんと

す。深く山川草木を愛してこれを視ること猶己を視るが如く、同情の念に堪へざるは固より然るべきことなり。

ときて見ん、老木を花もははれなま、

いまいく多びの春にあふべた。

あゝにまた我が住みうくてうあれなば、

松をひやりにならんとをらん。

同情は進んで愛着となりぬ。西行は官祿を捨てたり、妻子を捨てたり、すべて世間を捨てたり。されどゆかしき花よ、月よ。

花のづゝら花ふき年の春をあらむ、

何よつけてか日を送らまゑ。

うちつけにまゝ來ん秋此今宵まで

月ゆゑをしくなる命あふ。

愛着は迷なり、この雲を去らざれば眞如の月は明かなり難しと雖も、山水もと無心にして人間の如き魔性を有せず、これを以て窓前日夜の友とす、清淡虚無一心もまた物によつて動かされざること山の如く、機に従うて轉ずること水の如し。來往自在、こゝに疑懼の境も去つて安心は漸く決定すべし。

今更し春を忘るゝ花もはらじ、

安く待ちつゝ今日をくらぎん、

雲よたゞ今宵の月をまかせてん、

厭ふやてしものはきぬものゆゑ。

西行の歌は企て、成すものにあらずして、自ら成れるなり。そのいかに自然にして平易に、斧鑿の痕なきかを見よ。

あがむるゝ慰むよとはなけれど、

月を友よてあかすよるか。

今よ里は昔がとりは心せん、

怪しむまで袖志をきけり。

要するに西行は生れながらの歌よみにして、歌を作るものにあらず。天籟吹來つて松濤即ち鳴る。その聲必ず自然を離れず。平易率直を旨とすれども、風凄じければ鳴ることも亦強し。時に婉曲の響あれども、故らに人爲の巧を加

全歌
西行の歌は企て、成すものにあらずして、自ら成れるなり。そのいかに自然にして平易に、斧鑿の痕なきかを見よ。

へねば、天成の詩美は千歳の下愈、光を増して、後人をして渴仰止まざらしむるなり。(國文學全史)

一四 懈怠心

兼好法師

或人弓射ることを習ふにも、ろ矢をたばさみて的に向ふ。師のいはく、「初心の人、二つの矢を持つことなかれ。あとの矢を頼みて、初の矢に等閑の心あり。毎度只得失なく、この一矢に定むべしと思へ」といふ。僅に二つの矢、師の前にて一つを疎かにせんと思はんや。懈怠の心自ら知らずと雖も、師之を知る。この戒、萬事に互るべし。道を學する人、夕べには朝あらんことを思ひ、朝には夕べあ

兼好法師

俗名吉田兼好

鎌倉室町時代

文學者

正平五年(1110)

寂

年六十九

物のあはれ
春はたゞ花のひ
とへにさくばか
りものゝあはれ
は秋ぞまさされる

らんことを思ひて、重ねて懇に修せんことを期す。況や一刹那の中に於て懈怠の心あることを知らんや。何ぞ只今の一念に於てたゞちにすることの甚だ難き。(徒然草)

一五 四時のあはれ

兼好法師

折節の遷り變るこそ物ごとにあはれなれ。「物のあはれは秋こそまさされ」と人ごとにいふめれど、それもさるものにて、いま一きは心も浮き立つものは、春の景色にこそあめれ。鳥の聲などもことの外に春めきて、のどやかなる日影に垣根の草萌え出づる頃より、やゝ春深く霞みわたりて、花もやうやうけしきだつほどこそあれ、折しも雨風打續きて、心あ

花橘

さ月待つ花橘の
香をかげは昔の
人の袖の香ぞす
る

筆蹟

花にむかひてふ
るきをおもふ
春の日のなかし
わかれにつくつ
くとなくさめか
ねて花をみるか
な

四月八日佛誕

賀茂ノ葵祭
四月ノ中ノ西ノ
日

わたゞしう散り過ぎぬ。青葉になりゆくまで、よろづに唯心をのみぞ惱ます。花橘は名にこそおへれ、猶梅の匂にぞ、いにしへの事も立返り戀しう思ひ出でらるゝ。山吹の清

花はしらてふきを
春の日はあつた
さくさめあそ花よりみるん

(藏爵侯田前)蹟筆師法好兼

灌佛の頃祭の頃、若葉の梢涼しげに茂りゆく程こそ世のあはれも人の戀しさもまさされと、人の仰せられしこそ、げにさ

一五 四時のあはれ

るものなれ。五月、菖蒲葺く頃、早苗とる頃、水雞の叩くなど、心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見え、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月、祓またをかし。棚機祭るこそなまめかしけれ。やうく夜寒になる程、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づく程、早稻田刈りほすなど、取集めたる事は秋のみぞ多かる。又野分の朝こそをかしけれ。言續くれば、皆源氏物語、枕草子などにことふりにたれど、同じ事また今更に言はじともあらず。思しき事言はぬは腹ふくる、業なれば、筆に任せつ、あぢきなきすさびにて、かいやりすつべきものなれば、人の見るべきにあらず。さて、冬枯の景色こそ秋にはをさく劣るまじけれ。汀の

思しき事
おぼしき事いは
ぬはげにぞ腹ふ
くるゝこゝちし
ける

草に紅葉の散りとままりて、霜いと白う置けるあした、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはて、人毎に急ぎあへる頃ぞ、またなくあはれなる。すさまじきものにして、見る人もなき月の寒けく澄める二十日あまりの空こそ心細きものなれ。御佛名、荷前の使立つなどぞ、あはれにやんごとなき。公事ども繁く、春のいそぎに取重ねて催しおこなはるゝ様ぞいみじきや。追儼より四方拜に續くこそ面白けれ。つごもりの夜いたう暗きに、松どもともして、夜半過ぐるまで人の門叩き走りありきて、何事にかあらん事しくのゝしりて、足を空にまどふが、曉方よりさすがに音なくなりぬるこそ、年の名残も心細けれ。亡き人の來る夜

早稲川早稲川
たうまうま

とて魂祭るわざは、此の頃都にはなきを、あづまの方には猶
する事にてありしこそあはれなりしか。
かくて、明け行く空の景色、昨日に變りたりとは見えねど、引
きかへめづらしきこゝちぞする。大路のさま、松立て渡し
て華やかに嬉しげなるこそ、またあはれなれ。(徒然草)

松本亦太郎

一六 自然と色彩 その一

松本亦太郎

心理學者
文學博士
東京帝國大學教
授
慶應元年(西五五)
生
ローラーブリッ
ヂマン
盲啞テ味覺ヤ嗅
覺モ不十分デア
ツタ米國婦人
(1899-1999)

自然そのものは如何なるものであるか、我々にはよくは分
らない。我々に分るのは心に映じた自然の姿である。自
然は觸覺に映ずる。生來盲聾の女天才ローラー、ブリッヂ
マンの味はつて居つた美妙の自然は唯觸覺に映じた自然

の相であつた。自然が聽覺に映ずる時は音響の世界を現
出する。が、自然の割合に廣い部分を反映せしむるは視覺
であらう。これが色彩の世界となつて我々に意識される。
最も美しい、又最も變化の多い世界である。
自然界に現れる色彩は千差萬別であるが、これに對する心
持の方から見ると、全色彩を先づ二つに大別する事が出來
る。即ち溫暖の心持を生ずる色彩と寒冷の心持を生ずる
色彩とである。寒冷色の中心は青である。そして青に近
い色は青緑から紺青に至るまで皆涼しい感じを與へる。
溫暖色の中心は橙黄であつて、橙黄に近い色は暗赤色から
黄緑に至るまで皆暖かな感じを與へる。

日本や伊太利あたりでは晴天には大空は青々として眞に美しい。然るに北歐諸國では晴れて居る時でも空氣が透明でなく、空は灰色になつて居る。勿論多少の青みはあるが、さへ^くとした青色では無い、鉛の様な色をしてゐる。従つて晝でも夜でも天體の光が朦朧としてゐる。北歐の人が伊太利の自然を讚美して止まないのは、彼等が青天白日の美を見る事の稀な證據である。さてこの大空の色は飽和の度の強い青では無い、濃い青を日光で薄くしたのだ。あの淡青即ち空色は靜かな色だが、喜悅の色である。最も濃い青即ち紺青は深い海の表面に於て見られる。きはめて濃厚な紺青は深さ一萬七八千呎もある大西洋の水

面で見られる。紺青の水より雪白の波の花の咲くのも不思議だが、咲いた花が忽ち紺青に染められるのも面白い。雪白と紺青との争は限もなく繰返されて二つの色彩が目覺しく活躍する。紺青は如何にも美しい色だが、沈鬱で一種の妻みがある。希臘の内海や伊太利の沿岸の如く海が淺くなると、紺青は稍、淡くなつて瑠璃の寶玉を液化した様に爽快になり、更に瑞西の山間ルツェルンの湖水などになると、藍青は緑を帯びて、恰も翡翠の玉を水に化したるが如く、色は靜かだが沈鬱の趣は淡くなる。ライン川の上流などになると、緑色は益勝つて青色を壓する。概して水は深きより淺きに移るに従ひ紺青より青を経て綠に移るので

ある。地球の表面の大部分をなして居る水の色が青であり、天空の色が青であるのだから、天地の色は青が主調になつてゐると謂はなければならぬ。空の見える處、水の動く處、人間の心を沈靜させる働が斷えず行はれて居る。花の中にも菖蒲、紫陽花、野生の朝顔などの色は何れも涼しく靜かに人の心を休息させる色である。

青と正反對なのは橙黄色である。是は暖い色であると共に人の心を大いに發揚させる。太陽から發射する光は最も光輝ある橙黄色である。秋の夕陽が西山に没せんとする際の空の色は、太陽から出る黄金色の本性を最もよく發揮する。例へば東海道に於ける富士山、京都に於ける愛宕

シナイ山
亞細亞洲ノ西南
隅シナイ半島ニ
峙ツ山

エホバ
ヘブライ語デ神
ノコト

イスラエル
太古小亞細亞ノ
パレスチナ地方
ニ榮エタ民族

山、その後、日の入らんとする時の空は、全く金箔の色と化し、山岳の碧色と映帶して一段の見榮えがある。私の心に最も強い印象を残したのは紅海の上から眺めたシナイ山の夕陽の景色であつた。シナイ山は絶頂から黄金の光を浴び、山の中腹に懸つた雲は黄金の神火が燃える如く、莊嚴云はん方なかつた。炎の中にエホバの聲が聞えたとか、暗の中に火の柱が立つて、イスラエルの民の沙漠旅行を先導したとか云ふ様を猶太の神話はあゝ云ふ景色から涌き出したのではあるまいか。

太陽の光が月や星に反映すると、熱烈な黄金色が幾分和かく冷かな色になる。地平線を出る時の月は空氣の汚濁せ

るため銅色を帯びて居るが、段々高くなつて澄渡れる空気を透して月を見ると、空気の青色が加つて來るために月は黄金に銀を混じたるが如く、稍蒼白になり、冷靜の趣を生じ、人をして沈思せしめる。天體天象の色としての黄金色は其の發顯の規模が大きくて人の心を躍動せしめるのであるが、小規模に於ては地上の花の色となつて人を樂しませる。冬の蜜柑畑、春の菜種畑は何人が眺めても怡悅を感じずる。連翹山吹月見草、黃菊水仙の類、四季の花として何れも優しい懐かしい趣がある。南瓜、胡瓜の花にも棄てがたい野趣がある。

一七 自然と色彩 その二

松本亦太郎

地上に於ける非情の生物の有する特色であつて、天には無い色が綠色とその附近の色である。この色は紫紺と橙黄との中間に位する。いつまで眺めて居ても飽きない色である。嫩草や若葉は大抵淡綠色で始るが、日を経るまゝに綠色となり、終に暗綠色となる。若葉の萌え出るときは誠に美しい、氣が暢びくする。五月初の若葉は四月初の花よりも遙に趣が深い。東台、東山、宇治嵐峽の新緑を訪うて、樂しむ人の割合に少いのは、花見客の多數が自然の風色を樂しむ心をもつて居らぬ事を示して居る。佛獨あたりでは花に對しては餘り騒がないが、森林の色を樂しむことは

著しい。また英米では面積の廣大なる芝生を造ることが實に巧である。共に其の國民が綠色趣味に富んで居る事をよく示して居る。日本の三都のうちで市街に樹木の最も多いのは東京である。殊に高臺から見渡すと東京は樹木の都と謂つても可い。京都は周圍に美麗なる山色はあるが、御苑を除いては市中には樹木が乏しい。大阪は市の内外共に樹木は甚だ少い。製造都會が自然を隔絶するは已むを得ないが、自然から餘り隔離すると人の心は俗了する。大都會に樹木鬱蒼たる大公園を作るのは、都人士の心を健全ならしむる上に必要な事である。暖い色と寒い色との中間に在る點に於ては綠と同じであ

るが、色の性質に於て正反對なのは紫である。紫にも紺青に近いものと赤に近いものとある。牡丹芍薬躑躅の花は赤に近い紫で、杜若菖蒲堇藤の花などは紺色に近い紫である。木蓮の花は丁度桔梗と赤との中間にある。人間に培養された朝顔の花は差別が甚だ多いが、大抵赤と青との間に變化して、紫系のものが最も多數を占める。總じて紫系の花は人を興奮させると同時に人を沈靜させる。派手なるがごとく、おとなしきがごとく、兩様の趣が具はつて居るため人を悩ます色である。薄紫になると優美の情趣が加つて来る。紫色に光輝が加ると莊嚴な色になる。ゲイテが「神がすべての人に審判を下す世界の末日の色は必ず

ヴィクトリア女
皇
英國ノ女皇
(1819—1901)

や紫色であらう。と言つたのは其の莊嚴の趣から考へたものであらう。ヴィクトリア女皇は紫を好み、女皇の大葬の日は倫敦市中紫の幕で張りつめた。紫は王者の色と謂ふことも出来る。

諸色の中で人の心を最も強く興奮させるのは赤い色である。緑は非情の生物が外面に發顯する色であるが、赤は有情の生物の身體内に流動する重なる色である。併し赤は又天象の色として、或は植物の色として頗る著しい色である。火山が爆發して天に火の柱を立てる時などは赤も随分凄じいものになる。何人も知つて居るのは夕やけの現象である。

通例地上に於て眺めることの出来る赤い風色は秋の紅葉である。碓氷峠日光山あたりの紅葉は満山燃ゆるが如く、京都附近の紅葉は色が冴えてゐるが箱庭的の風景が多い。或年の十月の初にロッキーマウンテンを通過した。ロッキーマウンテンにはそれこそ實に大きい山が突兀として天に聳え、雪を戴いて、氷河などが流れて居る、裾の山々溪々の木の葉は眼路の及ぶかぎり紅に染められ、汽車はいくら走つても容易に紅葉の洞を出ぬけることが出来なかつた。

花として咲出づる紅は淡紅のものが多く、深紅は濃厚に過ぎてこれを廣い面積に擴げると比較的味が乏しくなるが、淡紅となると喜悅の情があつて味が深くなる。櫻の花

でも桃の花でもれんげの花でも櫻草でも、民衆の狂喜するのは皆淡紅である。尤も小さい花なら深紅でもよい。罌粟の花とかダリヤの花とか云ふ様なものは美しい。牡丹なども一二輪深紅で咲いて居るのは見榮えがある。自然界に現れる色彩は明暗の兩極にすゝむに従ひ、漸次に色を失ひ、一方に於ては白色となり、他方に於ては黑色となり、全く無色となる。白は喜悅清淨の色である、白雲、白雪程清らかなものはない。白梅、白蓮、卯の花、白躑躅、白菊、白牡丹等何れも喜悅清淨の象徴である。蕎麥、大根の花畑なども棄て難い風情がある。如何なる色でも白が混じて薄い色になると喜悅の相を呈する事になる。自然界には色彩の

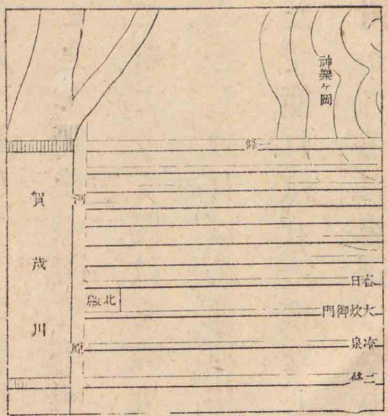
競争がある。併し如何なる色でも悉く他の色を壓迫禁止して全勝を占める事は出来ない。唯一つ色彩界を絶滅する力をもつて居る色がある。それは暗黒色である。眞暗黒は神祕の色で、全視覚世界を併呑する怪物である。自然界は色彩の無盡藏である、我々人間の精神生活は此の色彩のために極めて興味深く着色されて居る。而して此の自然の色彩を基礎として人間は美術及び工藝上の色彩を生ぜしめ、之によつて更に色彩の世界を豊富にする。若し自然界及び人間界より色彩を奪ひ去つたならば、人生は餘程落莫たるものになるであらう。(渡り鳥日記)

新院
崇徳上皇
左府
左大臣藤原頼長

一八 鎮西八郎

新院は齋院の御所より北殿に遷らせ給ふ。左府は車にて参り給ふ。白河殿より北河原より東春日の末に在りければ、北殿とぞ申しける。南の大炊御門表に東西に門二つあり。東の門をば平馬助忠正承つて、父子五人並に多田藏人大夫頼憲都合二百騎にて固めたり。西の門をば六條判官爲義承つて、父子六人して固めたり、其の勢百騎ばかりには過ぎざりけり。これこそ猛勢なるべきが嫡子義朝に付き、多分は内裏へ参りけり。

こゝに鎮西八郎爲朝は、我は親にも連るまじ、兄にも具すまじ、功名不覺も紛れぬ様に、只一人、いかにも強からん方へ差向け給へ。たとひ千騎もあれ、萬騎もあれ、一方は射拂はんずるなり。とぞ申しける。依つて西の河原表の門をぞ固めける。北の春日表の門をば左衛門大夫家弘承つて、子供具して固めたり。其の勢百五十



洛東地圖

騎とぞ聞えし。

抑爲朝一人として殊更大事の門を固めたること、武勇天下に許されし故なり。件の男、器量人に超え、心飽くまで剛にして、大力の強弓、矢つぎばやの手利なり。弓手の肘、馬手に四寸延びて、矢束を引くこと世に超えたり。幼少より不敵にし

旁若無人
王猛語三桓温一而
談二世事。常捫
レ龜而言。旁若
無人。

て、兄にも所を置かず、旁若無人なりしかば、身に添へて都に置きなば悪しかりなるとて、父不孝して、十三の歳より鎮西の方へ追ひ下すに、豊後の國に居住し、尾張權守家遠をめのととし、肥後の阿曾平四郎忠景が子に三郎忠國が婿に成つて、君よりも賜はらぬ九國の總追捕使と號して筑紫を従へんとしければ、菊池原田をはじめとして、處々に城を構へてたて籠れば、其の儀ならば、いで落して見せん」とて、未だ勢も附かざるに、忠國ばかりを案内者として、十三の歳の三月の末より十五の歳の十月まで、大事の軍をすること數十箇所なり。城を攻むる謀敵を伐つ術人に勝れて、三年がうちに九國を皆攻落して、みづから總追捕使におし成つて、悪行多

香椎宮
官幣大社
福岡市ノ東一里
香椎ニ鎮座
祭神ハ仲哀天皇
並ニ神功皇后

かりけるにや、香椎宮の神人等都にのぼり訴へ申す間、いにし久壽元年十一月二十六日、徳大寺中納言公能卿を上卿として外記に仰せて宣旨を下さる。

源爲朝、久住宰府、忽諸朝憲、咸背綸言。梟惡頻聞、狼藉尤甚。早可令禁進其身。依宣旨執達如件。

然れども、爲朝猶參洛せざりければ、同じき二年四月三日、父爲義を解官せられて前檢非違使に成されけり。爲朝これを聞きて、親の科に當り給ふらんこそあさましけれ。この儀ならば、我こそいかなる罪科にも行はれんずれ。とて急ぎ上りければ、國人共も上洛すべき旨申しけれども、大勢にて罷上らんこと、上聞穩便ならず。とて、形の如くに附従ふ兵ば

かり召具しけり。依つて去年より在京したりしを、父不孝を宥して今度の御大事に召具しけるなり。

八龍
源氏重代ノ鎧
樊噲
漢ノ高祖ノ臣
勇猛ノ士
張良
漢ノ高祖ノ臣
智謀ノ士
吳子
名ハ起
衛ノ人
兵法ノ大家
孫子
名ハ武
齊ノ人
兵法ノ大家
養由
楚ノ人
弓ノ名手

爲朝は七尺ばかりなる男の、目角二つ切れたるが、紺地に色の絲を以て獅子の丸を縫つたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて白き唐綾を以て緘したる大荒目の鎧、同じき獅子の金物打つたるを着るまゝに、三尺五寸の太刀に熊の皮の尻鞘入れ、五人張の弓、長さ七尺五寸にて、銃打つたるに、三十六差したる黒羽の矢負ひ、兜をば郎等に持たせて歩み出でたる體、樊噲も斯くやと覺えてゆゝしかりき。謀は張良に劣らざれば、堅き陣を破ること、吳子、孫子が難しとする所を得、弓は養由をも恥ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れずと

いふことなし。上皇を始め奉つて、あらゆる人々、音に聞ゆる爲朝見んとて、舉り給ふ。

左府乃ち合戦の趣計らひ申せ、と宣ひければ、畏つて、爲朝久しく鎮西に居住仕つて、九國の者ども従へ候について、大小の合戦數を知らず。中にも、折角の合戦二十餘箇度なり。或は敵に圍まれて強陣を破り、或は城を攻めて敵を滅すにも、皆利を得ること、夜討に若くこと候はず。然れば、只今高松殿に押寄せ、三方に火をかけ、一方にて支へ候はんに、火を遁れん者は矢を免るべからず、矢を恐れん者は火を遁るべからず。主上の御方、心にくゝも候はず。但し兄にて候義朝などこそ、駈けいでんずらめ。それも眞中さして射通し

高松殿
假内裏
後白河天皇ノ御所

候ひなん。まして、清盛などがへろく、矢何程の事か候へき。鎧の袖にて拂ひ蹴ちらして捨てなん。行幸他所へ成らば、御免されを蒙つて御供の者少々射んずる程ならば、定めて駕輿丁も御輿を捨て、逃去り候はんずらん。其の時爲朝参りむかひ、行幸を此の御所へ成し奉り、君を御位に即け参らせんこと、掌を反す如くに候べし。主上を迎へ参らせんこと、爲朝矢二つ三つ放さんずるばかりにて、未だ天の明けざらん前に勝負を決せん條、何の疑か候べきと、憚る所もなく申したりければ、左府爲朝が申す様、以ての外の荒儀なり。年の若きが致す所か。夜討などいふ事、汝等が同士軍十騎二十騎の私事なり。さすが主上、上皇の御國争に、源

富家殿
左大臣頼長ノ父
忠實ノ宇治ノ別
邸

平數を盡して兩方に在つて勝負を決せんに、むげに然るべからず。其の上南都の衆徒を召さるゝことあり、興福寺の信實・玄實等、吉野十津川の指矢三町、遠矢八町といふ者どもを召具して千餘騎にて参るが、今夜は宇治に着き、富家殿（富家殿）の見参に入り、曉こゝへ参るべし。彼等待ち調へて合戦をば致すべし。又明日、院司の公卿殿上人を催さんに、参らざる者どもをば死罪に行ふべし。首を刎ぬること兩三人に及ば、残りなどは参らざるべきと仰せられければ、爲朝、上には承服申して、御前を罷立ちてつぶやきけるは、和漢の先蹤、朝廷の禮節には似も似ぬ事なれば、合戦の道をば武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御計ひ如何あらん。義

朝は武略の奥義を究めたる者なれば、定めて今夜寄せんとぞ仕り候らん。明日までも延びばこそ吉野法師も奈良大衆も入るべけれ、只今押寄せて風上に火をかけたらんには、戦ふともいかで利あらん。敵勝つに乗る程ならば、誰か一人安穩なるべき。くちをしきことかな」とぞ申しける。

(保元物語)

一九 狐塚

主「此のあたりの者で御座る。某、山田を數多持つて御座る。當年は事の外よう出來て御座る。さりながら此の頃は鹿・猿・貉が出て田を荒します。太郎冠者を呼びだし、山

田の番にやらうと存ずる。やいゝ太郎冠者在るか。」

太「はあ。御前に居ります。」

主「汝を呼出すこと別の事でない。當年は身共の山田が事の外よう出來た。其につき、此の頃は鹿・猿が田を荒す程に、汝は今夜山田へいて、鳥獸も來たらば、追うて番をせい。」

太「畏まつて御座る。私一人で御座るか。」

主「いや後程は次郎も見舞にやらう程に、先づ行け。」

太「心得ました。」

主「さりながら此の中は狐塚の狐が出てばかすと云ふ程に、ばかされぬ様にして番をせい。」

太「それはこはい事で御座る。もはや參ります。」

主「明日早々歸れ。」

太「はあ。」

主「えい。」

太「扱もく迷惑な事いひつけられた。夜晝使はるゝといふは氣の毒な事ぢや。參る程に是ぢや。先づ是にゐて番を致さう。」

主「太郎冠者を山田へ番に遣はして御座る。定めてさびしうしてゐるで御座らう。次郎冠者を見舞につかはうと存ずる。やいゝ次郎冠者あるか。」

次「是に居ります。」

主「汝は太儀ながら山田へいて、太郎冠者が伽をしてやれ。」

次「畏まつて御座る。」

主「小筒も少し持つて行け。」

次「心得ました。是は扱迷惑なれども、參らざばなるまい。主命ぢや、是非に及ばぬ。是は暗うてどこやら知れる事でない。呼ばはつて見よう。ほういゝ。太郎冠者やい。どこに居るぞ。」

太「さればこそ狐が出た。あれは次郎冠者が聲ぢや。よう似せた。おのればかさるゝ事では無いぞ。先づ眉毛をぬらさう。」

次「ほういゝ。」

太「ほういゝ。こゝにゐるは。」

次「どこにゐるぞ。」

太「こゝにゐるは。やあ次郎冠者か。」

次「なか〜。頼うだ人が言ひ付けられて伽に來たは。」

太「ようこそおりやつたれ。扱も〜ようばけた。そのま

まの次郎冠者ぢや。捕へて縛つてやらう。やい次郎冠

者。最前向ふの山から大きな鹿が出たを、身共が追うた

れば、こなたの山へくわら〜と逃げたは。」

次「それはでかした。」

太「どつこへ。やる事ではないぞ。」

次「是は何とするぞ。」

太「何とするとは。狐め、ばかさるゝ事ではないぞ。」

次「おれは次郎冠者ぢや。」

太「何の次郎冠者。おのれ縛つて、此の柱にく〜つて置いて、

狐殿、よい體たゝの。おのれ今に皮を剥いでくれうぞ。」

主「太郎冠者次郎冠者を山田へ遣はして御座る。心もとな

う御座る。見に參らうと存ずる。ほうい〜。太郎冠

者やい。次郎冠者やい。ほうい〜。」

太「是はいかな事。また狐が出をつた。あれは頼うだ人の

聲ぢや。是も捕へてやらう。ほうい〜。」

主「ほうい〜。どこにゐるぞ。」

太「こゝにゐます。」

主「やあ是にゐるか。淋しからうと思つて見舞に來た。次

郎冠者を先へおこしたが。

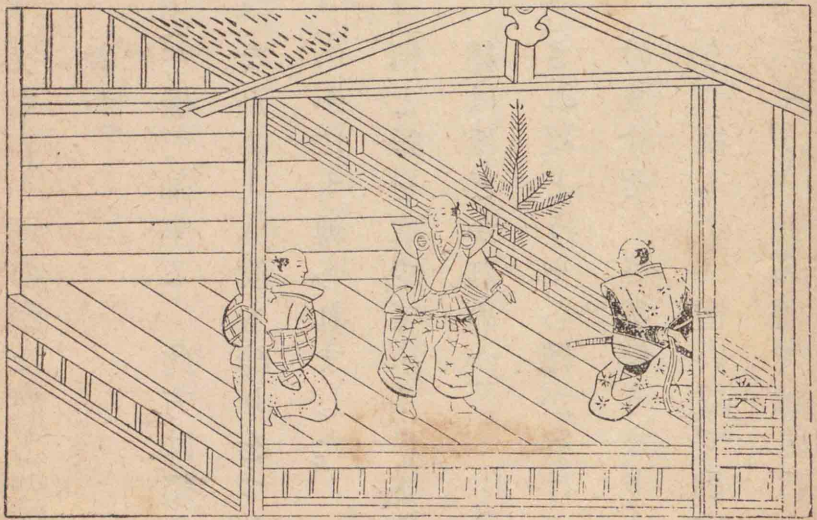
太「なか〜。あれにゐます。これはいかな事。是もよ
うばけた。そのまゝ頼うだ人ぢや。縛つてくれう。がつ
きめ。おのれだまさるゝ事ではないぞ。」

主「是は何とするぞ。身共ぢや。」

太「おのれもようばけた。先づ縛つて、此の大木にくゝりつ
けて置いて、致しやうがある。狐は松葉でふすべるとい
やがるといふ。ふすべてやらう。さあ〜尾を出せ。
鳴け〜。」

主「おのれ太郎冠者め。主を此の様にして。罰當りめ。」

太「何を狐殿いはるゝ。さらば次郎冠者もふすべてやらう。」



(記言狂續)塚狐言狂

さあ〜鳴け〜。こ
んこんといへ。」

次「是は何とする。」

太「あれや〜いやがるは、
いやがるは。おのれ二
匹ながら鎌を取つて來
て、皮を剥いでくれうぞ。
待つてをれ。ようばか
さうと思つたなあ。唯
今殺してくれうぞ。鎌
を取つてくるぞ。」

主「扱もくゝ氣の毒な奴ぢや。やあそれに見ゆるは次郎冠者か。」

次「左様で御座る。此方は頼うだ御方か。」

主「なかく。汝も縛りをつたか。」

次「いかにも縛られました。」

主「何と鎌を取つて来る、殺さうと言ひをつたが、何とそちが繩はほどかれぬか。」

次「されば、どうやら繩が解けさうに御座る。解けますぞ、解けますぞ。さあ解きました。どれく、此方も解きませう。扱もくゝ憎い奴で御座る。何とした物で御座らう。主「いやくゝ此の體ではそばへよるまい程にもとの様にし

てみて、是へ來たらば捕へて、あいつをゆりにあげう。

次「一段とよう御座らう。」

主「さあ是へよつて元の様にしてみよ。」

次「心得ました。」

太「狐めは二匹ながら居るか知らぬ。此の鎌で殺してくれう。さあ今打殺すぞ、打殺すぞ。」

主「それや次郎冠者。」

次「心得ました。」

主「おのれにくいやつ。次郎冠者足を持って。」

次「心得ました。」

主「さあ、ゆりに上げ、ゆりに上げ。」

太「是は何と狐どもするぞ。」

次「狐とはまだ、おのれめは、にくいやつ。縛り居つたがよ

いか。是がよいか。是がよいか。」

太「扱は頼うだ人。次郎冠者か。免させられ。まつびら御

ゆるされ。まつびら御ゆるされ。」

次「どこへ失せる。やるまいぞ。やるまいぞ。」（新狂言記）

二〇 鎌倉室町時代の文學

源頼朝幕府を鎌倉に開きて、政體こゝに一變す。公卿は政權を失ふと共に意氣沮喪し、武人は兵事に勵めども文事に疎く、庶民は數度の戰亂に疲勞し困憊して生活に餘裕なし。

従つて當代の文學に雄篇傑作の多からざりしは、亦已むを得ざる所なり。

當時専ら武家の祐筆となり參謀となりて文筆に従事したる者は僧侶にして、純文學の如きも多くは其の手に成れり。されば、此の時代の文學に佛教的傾向の存すること平安朝より甚だしく、到るところに無常輪廻の思想を見るは、一は僧侶の手に成れるがため、一は時勢の然らしめし所にして、實に當時の頻繁なる變亂は社會をして自ら厭世に傾かしめ、盛者必衰會者定離の觀念の深く人心の根柢に染みたること、また舊時の比にあらざりしを思ふべし。漢學は漸く衰へ、上流の人も多くは純粹なる漢文を書き得

ず、こゝに和漢混淆の一種特別なる文體を生ぜり。この文體を以て記したるものにして最初に成功したるは蓋し方丈記なるべし。方丈記は鴨長明が源平の紛争たえまなき世を厭ひて山城の日野に隱棲せることを記せる短篇にして、文辭の流暢を以て顯る。

更に和漢混淆體の大いに光彩を放ちたるは、源平争鬪の次第顛末を記したる軍記類なり。抑、源平二氏が盛衰の迅速なるや、これを見聞するものをして、自ら一種悲壯の感に打たれざるを得ざらしむ。こゝに於てか軍記の作あり。その最初に出でたるものは保元平治の兩物語にして、共に簡勁を以て勝れたり。ついで出でたる平家物語は蓋し曲節

を附して諷誦せんが爲に作られしものなるべく、縦に雄大悲壯なる戦記を以て貫き、横に哀憐優雅なる物語を錯綜して、其の間にまた幽玄奥妙の佛教趣味を點綴す。されば治承の春を名殘に壽永の秋を西國さして落ちゆける夢よりもはかなき平家一門が榮枯盛衰の記述には、言々涙あり、句句同情あり、讀む人をして、讀誦一過、忽ち無常厭世の感を懷いて佛道に歸入せしめずんばやまざらんとす。その冒頭を、祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を現す。といふに起して、最後の卷には、建禮門院が後白河法皇への物語に、其の經過せる一生を六道に譬へたまへりといふに考へても、以て其の全豹を推すに足

るべし。源平盛衰記は、平家物語に比してその記事更に詳密なり。文章頗る華麗にして、漢語を交ふること平家より遙に多し。太平記は平家物語に倣ひて作れるものにして、後醍醐天皇の御即位に筆を起し、爾後五十年間の戦亂の始末を記述す。中興の事業に多大の同情と尊敬とを捧げ、數多の忠孝節義の士の事蹟を點綴して、其の間に倫理的、宗教的觀念を鼓吹せるを見る。文體は漢字を用ふること更に著しく、文脈はた漢文調を加へたり。是等のものと稍其の趣を異にし、率直平易なる文體にて書ける散文に、十訓抄古今著聞集、宇治拾遺物語あり。何れも古來の面白く珍しき事實を輯めたり。

徒然草は兼好法師の作にして、その趣味を談じ、世態人情を説く間に、著者が修得せる道佛主義の眼鏡によりて、よく皮相の虚飾を透して隠れたる社會の裏面を洞察し、爬羅剔抉、痛快にそが矛盾撞着のあるところを暴露せり。文章も亦暢達にして雅馴、交ふるに奇句警語の天外より落ち來るものを以てし、かの枕草子と併せて、世に隨筆の雙絶と稱せらる。

此の外、歴史としては神皇正統記、増鏡等最も見るべし。神皇正統記は准后北畠親房の著にして、建武中興の業破れて王道の衰頽せるを憤慨し、古の歴史に照して皇統の正閏を論じ、三種の神器の在るところ、即ち名分の存するところな

るを疾呼せるものなり。是實に國文を以て綴れる議論文の權輿ともいふべく、婉曲なる字句のうちに博大なる氣格を藏して、堂々としてまた朗々たり。増鏡は後鳥羽天皇御即位の始より後醍醐天皇の隱岐より還幸せられしまで、凡そ百五十年間の事蹟を記述せり。記事客觀的にして、毫も著者の主張を交へず。文章また流麗なり。

和歌は其の初期に於て最も盛にして、元久二年には、後鳥羽上皇の勅により、藤原家隆等新古今和歌集を撰せり。延喜以降、和歌の勅撰實に八度に及びしが、就中古今と新古今と殊に勝れたり。新古今は其の名の示す如く、よく古今を改造して、加ふるに客觀的敘景の新調を以てし、別途に比較的

圓滿なる發達を遂げしものといふべく、句調流麗、その新奇なること前古無比と稱せらる。従つて當時有名なる歌人亦少からず。まづ俊成あり、西行あり、寂蓮あり。關白良經は天授の才を以て時流の歌を詠じ、將軍實朝は萬葉の古調を喜びて金槐集を作る。定家は俊成の子にして、家隆と共に名匠の譽一世に高く、前者が措辭の巧緻を喜べば、後者は最も暢達の調を尙べり。

室町幕府の世になりては、戰亂相繼ぎて干戈相見えざる日としてはなし。一時小康を見たる義滿の代の如き、實は大風到らんとして暫く平穩を持する時の如きのみ。永享に嘉吉に、一波は一波より甚だしく、應仁の亂に及びては、遂に急

潮突破して、風伯叫び、電將狂ひ、雷神轟く大混亂、京都を中心として、天下をこの混沌溟濛の裡に漂はすこと前後百餘年、上下擧つてその堵に安んずることを得ず、怨嗟の聲うたゝ四方に満ちぬ。艷麗なる百花は平和なる春にこそ咲き誇れ、かくすさまじき亂離の秋にいかでか榮えん。されば文學の如き、全く度外に置かれて、毫も發達すべき餘裕を存せざりしなり。

されど應仁の亂までは、流石に幕威尙地に落ちず、殊に將軍義満は柔弱にして遊樂を好み、義政は戰亂に遭へりと雖も、社會の辛酸を知らざるが如く、それ〴〵閑居を設けて文雅風流を樂しめり。されば水墨の畫、香茶の技などの發達せ

しもこの時にして、能樂の勃興に伴ひて當代唯一の文學たる謠曲を生じたるも、實に此の時代なりとす。

謠曲は蓋し當時の僧侶の手に成りしもの多かるべく、その中多く佛敎の思想を含む。趣向は幽靈顯れて往事を語り、巡錫の途なる名僧知識の回向によりて成佛するもの多數を占む。詞句は好んで古文辭を補綴すれども、皆よく諧和して球を轉ずる如き好調に富む。

能樂の餘興に狂言といふものあり。その技、能樂の嚴正なるに對して滑稽を旨とし、概して罪もなき失策談にて、中にも迂愚なる大名を主人公とせるもの多く、巧に人情の弱點を捕へて、誇張過大の脚色、よく人の頤を解かしむるものあ

能樂の餘興に狂言といふものあり。その技、能樂の嚴正なるに對して滑稽を旨とし、概して罪もなき失策談にて、中にも迂愚なる大名を主人公とせるもの多く、巧に人情の弱點を捕へて、誇張過大の脚色、よく人の頤を解かしむるものあ

り。その文は當時の言語をその儘に寫せるものにして、率直愛すべし。

之を要するに、この時代は多少特色ある文學を産せざりしにはあらざれども、上に平安朝を承けてその後殿たり、下に江戸時代を起すべき先驅たり、まづは兩盛時を繋ぐ連鎖たる時代と謂ふべし。（日本文學史教科書に據る）

二一日野の假庵

鴨 長 明

今日野山の奥に跡を隠して後、南に假の日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、その西に闕伽棚を作り、中には西の垣にそへて阿彌陀の畫像を安置しまつりて、落日を受けて眉

鴨長明
鎌倉時代ノ隱逸
歌人
建保四年（一一六六）
歿
年六十三トイフ
落日
色々の雲のはた
てをかざりにて
入日や彌陀の光
なるらん

多
佛
身院
學問
物見

間の光とす。かの帳の扉に普賢並に不動の像を懸けたり。北の障子の上に小さき棚を構へて、黒き皮籠三四合を置けり。即ち和歌管絃・往生要集ごときの抄物を入れたり。傍に箏・琵琶各、一張を立つ。所謂折箏・繼琵琶是なり。東に添へて蕨のほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓を明けて、こゝに文机を出せり。枕の方に爐あり、これを柴折りくぶる便とす。庵の北に小地を占めて、あばらなる姫垣を圍ひて園とす。即ち諸の藥草を植ゑたり。假庵の有様かくのごとし。

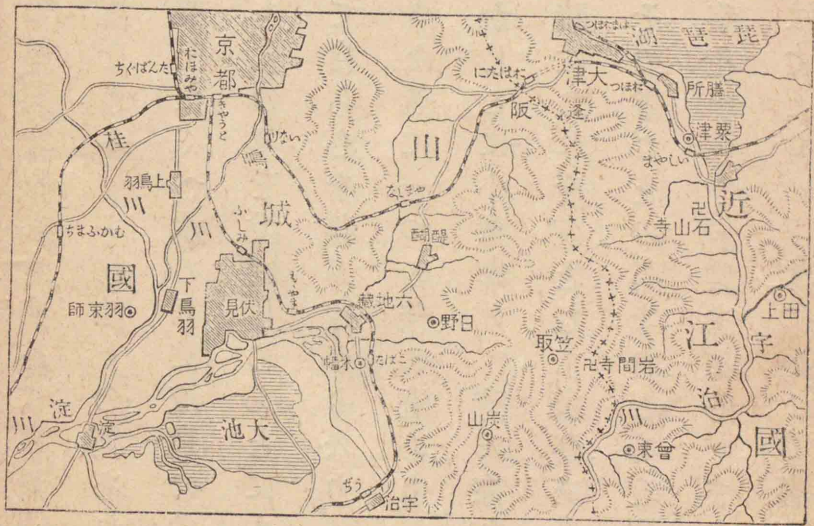
その處の様をいはい、南に笕あり。岩を疊みて水を溜めたり。林、軒近ければ、爪木を拾ふに乏しからず。名を外山と

跡の白波
 世の中を何にた
 とへん朝ぼらけ
 漕ぎゆく舟のあ
 との白波
 満沙彌
 沙彌滿齋
 俗名笠朝臣磨
 養老年間ノ人

いふ。正木の葛跡を埋めり。谷繁けれど西は晴れたり。観念の便なきにしもあらず。春は藤波を見る。紫雲の如くにして西の方に匂ふ。夏は時鳥を聞く。語らふごとに死出の山路を契る。秋は蝸の聲耳に満てり。空蟬の世を悲しぶかと聞ゆ。冬は雪を憐ぶ。積り消ゆるさま罪障に譬へつべし。もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、獨り居れば口業修めつべし。必ず禁戒を守るとしもなければ、境界なければ、何につけてか破らん。もし跡の白波に身を寄する朝には、岡の屋に行きかふ船を眺めて、満沙彌が風情を盗み、もし楓

風の風
 潯陽江頭夜送
 客、楓葉荻花秋
 瑟々。
 源都督
 太宰權帥源經信
 和歌管絃ノ名手
 世ニ桂大納言ト
 イフ
 承德元年(七五七)
 年八十二

の風、葉を鳴らす夕べには、潯陽の江を思ひやりて源都督の流を習ふ。もし餘りの興あれば、しばく松の韻（おん）に秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲を操る。藝はこれ拙けれども、人の耳を悦ばしめんとにもあらず。獨り調べ、獨り詠じて、自ら心を養ふばかりなり。また麓に一つの柴の庵あり。すなはち山守が居る處なり。かしこに小童あり。時々來りてあひ訪ふ。もし徒然なる時はこれを友として遊びありく。彼は十六歳、我は六十。その齡ことの外なれど、心を慰むることはこれ同じ。或は茅花を抜き、岩梨を採る。また零餘子を盛り、芹を摘む。或はすそわの田井に至りて、落穂を拾ひて穂組を作る。もし



日野附近圖

日麗かなれば、嶺に攀上りて、遙に故郷の空を望み、木幡山・伏見の里・鳥羽・羽束師を見る。勝地は主なければ、心を慰むるに障りなし。歩み煩ひなく、志遠く至る時は、これより峰續き炭山を越え、笠取を過ぎて、あるは岩間に詣で、あるは石山を拜む。もしは又、栗津の原を分けて、蟬丸翁が跡を

猿丸太夫
攝津ノ歌人
近江國曾東山中
ニ隱棲シタ

山鳥
山鳥のほろく
となく聲きけば
父かと思ふ母
かと思ふ

とぶらひ、田上川を渡りて猿丸太夫が墓を尋ぬ。歸るさには折につけつゝ、櫻を狩り、紅葉を求め、蕨を折り、木の實を拾ひて、且は佛に奉り、且は家苞にす。もし夜靜かなれば、窓の月に古人を忍び、猿の聲に袖を濕す。叢の螢は遠く眞木島の篝火にまがひ、曉の雨は自ら木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろくと鳴くを聞きて父か母かと疑ひ、峰のかせぎの近く馴れたるにつけても世に遠ざかるほどを知る。或は埋火をかきおこして、老の寐覺の友とす。恐ろしき山ならねど、梟の聲をあはれぶにつけても、山中の景色折につけて盡くることなし。況や深く思ひ深く知れらん人のためには、これにしも限るべからず。(方丈記)

二三 千客萬來

千客萬來、皆來るとこまるなり。
 轉寐の顔へ一冊屋根にふき。
 武者一人叱られてゐる土用干。
 おさへればすゝきはなせばきりぐす。
 よつびいてひようと放さぬ案山子かな。
 本降になつて出てゆく雨やどり。
 泣くくも善い方をとる形見わけ。
 名物を食ふが無筆の旅日記。
 芭蕉は飛びこみ、道風は飛びあがり。

釣れますかなどと文王そばへより。

二三 福澤先生を悼むその一 島田三郎

三田の高臺に長嘯して天下の瞻望を維ぎ、一管の筆を揮ひて泰西の文物を輸入し、三寸の舌を鼓して平民の氣焰をあげたる當代の巨人福澤先生逝けり。痛悼に勝ふべけんや。先生は一代の師表にして、明治の社會、先生に負ふ所極めて大なり。曩に先生中風の症に悩み、一時世人を痛憂せしめたれども、其の後輕快に赴き、漸く健康に復するを傳ふ。聞く者皆愁眉を開きて之を祝せざるはなし。吾人謂へらく、「先生齡六旬を超えて一旦大患に罹る、其の快談健筆以て社

島田三郎
舊幕臣
 政治家
 評論家
 嘉永五年（五二二）
 生

天愁に
天不_三愁遺_一
老_一
本月
明治三十四年二
月

會を鞭撻啓發せる故態に復せんこと難かるべし。と。然れども此の大平民の社會に存するは、後進の恃んで心を強くする所なり。即ち其の優游自適一日を永くし、以て吾人の志に酬いんを願ふこと甚だ切なりき。然るに天愁に此の老を遺さず、遂に本月三日午後十時を以て白玉樓に徴し去る。嗚呼先生の音容また接すべからず。豈哀惜嘆嗟に勝へんや。

先生の出處、經歷と主義、功績とは、普く世人の知る所なり。其の社會に對する關係より家庭の生活に至るまで、著書と自傳とに詳なり。吾人今之を繰返す必要なし。然れども其の梗概を約述し、吾人の所見を附記するは、亦敬慕追念の

志を表する所以なり。

先生の嚴父は中津藩士にして、子女五人あり。先生は其の季子なり。天保五年十二月二日、大阪の中津藩邸に生る。三歳にして父を喪ひ、母子共に中津に歸る。幼時の教育は尋常の郷學に漢學を誦習せるに過ぎず。然れども、其の思辨の力は讀書の力に越えて早く、儕輩を凌駕したりといふ。安政元年二月、先生二十一歳、是より先、米使來航し、海内騷然たりしが、泰西兵術の講習を必要とするに至り、先生また砲術研究の志を懷きて長崎に赴けり。是、蘭書讀習の機縁なり。明年大阪に來りて緒方洪庵先生の塾に入る。是、先生生涯の一轉機なり。蓋し其の初、蘭書そのものに意なく、こ

緒方洪庵
備中國足守藩士
文久三年(二三)
歿
年五十四

れによりて砲術を解する媒となし、もの其の學漸く進むに至りて純乎たる蘭學研修者となれるなり。中ごろ病のため一旦中津に歸りしが、幾時ならずして再び緒方塾に



福澤諭吉

復り學益進み塾頭に擧げらる。安政五年藩の徴に遭ひ、江戸藩邸の蘭學教授となる。當時米人の交際よりして英語の用益多し。

先生の炯眼早く轉學の必要を覺り、同學諸氏の説に反し、刻苦して英書を研修す。

安政六年十二月、幕府使臣を米國に派す。先生其の乘艦咸

木村攝津守
名ハ毅
號ハ芥舟
明治三十四年卒
年七十二

臨丸の艦長木村攝津守に乞ひ、從僕となりて米國に入り、其の文物を實見し、明年五月を以て歸朝す。是、先生生涯の大轉機にして、後來の事業此の觀光の時に得たるもの多し。文久元年十二月、幕府使節を遣はして歐洲諸國を歴訪せしむ。先生翻譯方を以て隨行し、英佛獨蘭葡露の諸都を觀て歸り、見聞益廣し。我が社會の暗黒の中に世界的光明を透したる「西洋事情」の一書は、實に此の行の產物なり。慶應三年、軍艦購入の件を以て再び米國に赴く。先生の意見はこれらの旅行毎に轉進し、開國の必要を確信し、幕府舊來の階級制と勤王に伴ふ鎖國論とは共に先生の信仰と背馳して到底相容るゝこと能はざりき。且先生は翻譯官たりしを

以て、内外交渉の機事皆其の掌るところの文書によりて之を知るを得て、幕府の敗亡、國勢の變轉、早くも先生の眼底に映ぜり。而して先生は政權の推移を洞察せしのみならず、社會事物の變化を豫知せり。先生がその雙劍を齧ぎて帶刀の風を棄てたるは、維新の際、士人長刀を佩びて殺氣天下に充てる間にあり。

既にして維新の業成り、政府大いに人材を登庸して、洋學通明の士多く徵用せられ、先生亦其の召命に遭へり。然れども固辭して就かず。其の得る所を以て社會を啓發せんと思ひ、こゝに自ら天下開導の大任を負ひ、首として慶應義塾を設けて後進を教育し、又著述、翻譯を以て世人を開誘せり。

爾來三十四年、藩邸に塾を立てしより四十年、通じて學生一萬餘を養へり。其の人社會各般の階級に出身して一般の進歩を助く。先生又明治十五年を以て時事新報を開刊し、政黨旺盛、政爭劇甚の間に、社會教育を主義として一般の知識を開き、又爭議を判するに任ぜり。

二四 福澤先生を悼むその二 島田三郎

先生は教育家なり、時代思想の鼓吹者なり。幕府の翻譯方となり、三回歐米に航せし外何の經歷あらず。其の後半の生涯は三田の高臺に逸居して三十餘年を経過す、波瀾なく、變化なし。然れども其の言論、文章を以て一世を鼓動し、社

會を陶冶したる偉大なる勢力は、獨り當世に匹なきのみならず、古今を通じて有數なりと評せざるべからず。蓋し嘉永安政以後、日本が世界の氣勢に刺戟せられ、新舊の思想相闘ふに際し、先生は新想誘引の先達となり、舊世界の殘壘を破りて一大勝利を博し、確に先登の月桂冠を戴ける者なり。先生の學專攻なし。故に一科の長所なく、又獨創の發明あらず。然れども思想博大、常識明敏、進歩の見解を一切の事物に應用して之を社會に弘布する能力に至りては、萬人に超絶せり。且其の識見は常に社會に先んぜり。先生幼時、儒教の薰陶を受け、其の長崎に赴くや、砲術を修めんと欲し、端なく蘭書を誦習せり。此の際既に砲術の以て志を成す

に足らざるを覺れり。其の江戸に來り、横濱に遊びて、英語の招牌を讀む能はざるや、忽ち蘭學を棄て、英語を學べり。其の海外に遊んで歸るや、幕府衰滅の免るべからざるを看取し、再び米國に入るや、兵器を購ふかはりに書籍を買うて歸り、戊辰戰亂の間、冷然書を講じて顧みず。王政復古、士皆進仕を榮とするに際し、巷間に在りて後進を誘掖し、戰餘の殺氣未だ收らざるに、兩刀を脱して市民と稱せり。漢儒が門人を食客と同視する時代に、授業料を收むる學校組織を立て、政争喧擾の間に社會的薰陶に力を致せり。これ皆時流に先だてる見にして、當世にぬきんづる眼を有するにあらざれば、能はざるなり。

テイヌ
佛國ノ歴史家
(1838-1893)

先生は百代を洞察し宇宙を解釋する哲學者にあらず、天人冥合、靈魂救濟を志とする宗教家にあらず、詞を修め句を鍊る文士にもあらず、否、却て文字のために思想を犠牲にする陋習を打破せんとせる人なり。これを要するに、一代の著述、文章は崇高宏大、深邃幽玄なる思想界に觸るゝに非ずして、毎時眼前の程度より一等を高めんとするにあり。而して見解分明、信仰確實、平易大膽なる文を以てこれを宣傳す。其の多數を動かして偉大なる効果を收め、優に社會改造の目的を達せしはこれがためなり。先生の筆述前後五十部百五冊、收めて其の全集にあり。此の他時事新報に載するものを合せば更に多からん。佛人テイヌ、曾て英國文界の

ジョンソン
英國ノ文學者
(1709-1783)



福澤諭吉筆蹟

偉人ジョンソンの全集を研究して謂つて曰く、其の十九世紀に於て新に學ぶべき奇思妙想を發見せずと雖も、其の十八世紀の必要に應じて社會を裨益せしもの多し。と。ジョンソンの勢力が當時に盛なりし所以、其の文書が一世に功ありし所以、こゝに在り。後の讀者其の奇思妙想を發見せざるを以て其の功を小なりとするを得ず。先生の文界に於ける位

置、蓋しこれに近し。

先生の勢力を以て單に其の文章・識力に歸するは、よく先生を知る者に非ず。先生は確信・實行を大膽明快に筆に載す。これ世を動かす所以に非ずや。其の獨立自尊を説くや、口舌・文章に於てするのみならず、これを其の躬行に於てし、其の歐米の文明を鼓吹するや、これを事物に應用し、其の自由平等を宣傳するや、階級隸屬の生活を破るに汲々とし、其の官尊民卑の弊を論ずるや、自身軒冕を泥塗にする概あり。其の家庭の尊貴を説示するや、先生まづ其の實例を置かんと努めたり。是、豈確信なき者の企て得る所ならんや。先生を以て拜金宗の大和尚となし、節義を輕んずる者と爲

一休
室町時代ノ禪僧
文明十三年(三
二)寂
年八十八
ソノ歌ニ「釋迦
といふいたづら
ものが世に出で
て多くの人をま
よはするかな

すは、尤も先生と其の時代とを曉らざる者なり。蓋し先生が歐米の文物を輸入せんとするや、其の反面に於て鎖國の舊夢を一掃するに努めざるべからず。自主獨立の主義を宣べんとせば、其の反面に於て隸屬服従の慣習を打破せざるべからず。平民自活の生業を教へんとせば、武士世祿の依頼心を棄てしめざるべからず。此の過渡の時機に會し、武士の理想的人物を罵倒して以て一世を警醒せしもの、即ち有名なる楠公論にあらずや。是、楠公其の人を撃つにあらずして武士の舊想を撃ちたるもの、恰も一休の俗僧を破せんが爲に釋迦を罵りたる意に髣髴たり。其の金錢を貴ぶの說法は、「武士は食はねど高楊枝」の氣習を破したるもの

ヴォルテール
佛國ノ文學者
(1694—1778)

に過ぎず。先生これがためには世の怒嘲を冒して戦へり。吾人却て先生の勇敢を稱せざる能はず。先生の明治社會に於ける位置は頗るヴォルテールが十八世紀の佛國に於けるものに似たり。先生が歐米の文物思想を總括して輸入せんとし、博大通達の材を以て盛に翻譯著述に従事せし所、恰もヴォルテールが英國に博採せしに似たり。甲が儒教を説破せし所、恰も乙が羅馬加持力を破壊せんとせしものに類す。而して其の辯銳利、能く破壊の目的を達したれども、其の言奇矯、後進をして誤解せしめ、一は拜金宗といふ一派の信仰を形成し、他は羅馬教を撃破したるもの一轉して宗教そのものを撃破せしがごとき觀を

荀卿 周代ノ哲學者
李斯 秦ノ政治家
荀卿ニ學ビ始皇帝ノ客卿トナツタ(四三)
生を知らず
季路問レ事ニ鬼神ノ子曰、未レ能レ事レ人、焉能事レ鬼。敢問レ死。曰、未レ知レ生、焉能知レ死。
性と天道
子貢曰、夫子之文章可レ得而聞一也、夫子之言性與天道不可レ得而聞一也。

呈せり。三田の末流に拜金の臭味あるは、荀卿の説によりて李斯の徒を出しゝに類す。吾人は先生を以て此の宗派の大和尚と認むる能はざるなり。先生は儒教を痛撃し、自活生業を唱道せしが、先生の行は却て儒教の旨に適へり。是、一見奇なるが如くなれども決して奇ならざるなり。先生は形而上の考案に多くの思を凝さず、専ら實踐躬行を貴べり。是、生を知らずして焉ぞ死を知らんとの旨に合するにあらずや。先生の歐米の文物を輸入する、専ら制度、商業、工藝、科學の實物的傾向を有し、哲理、宗教の研究工夫を要せず。是、性と天道とを語らざる者に類するに非ずや。其の一方に武士的生活を攻撃するに拘

天爵
有_二天爵者_一有_二人爵者_一。仁義忠信樂_レ不_レ徳、此天爵也。公卿大夫、此人爵也。人々己に貴きものあり

欲_レ貴者人之同心也、人々有_レ貴_二於己_一者、弗_レ思_レ耳。

晉楚の富

晉楚之富_レ可_レ及也。彼以_二其爵_一、我以_二吾仁_一、彼以_二其富_一、我以_二吾義_一。

伊藤東涯

名ハ長胤

京都ノ名儒

元文元年(三六九)

歿

年六十七

らず、去就を嚴明にして處士自ら高うせる迹は、儒教の進退節義を言ふ者に類す。其の自尊といふ教訓を以て天爵を全くせんとするは、孟軻の「人々己に貴きものあり」といふに合し、其の軒冕を泥塗にして王公に屈下せざる所は、大人を藐視し、晉楚の富と爵とに對するに徳と齒とを以てしたるに似たり。先生は知識を歐米に博採せしが、其の行實は蓋し幼時の儒學に涵養せられ、唯俗儒の範圍を脱したる者の如し。これを聞く、先生の嚴父百助君儒學を修め、伊藤東涯の人と爲りを慕へりと。堀川の實踐學派、先生の心を養ひしものか。而して先生少時尤も春秋左氏傳を愛讀せりと。いへば、節義に嚴なる所、由來なしと言ふべからず。

先生晩年著す所頗る壯年の思想に異なり。福翁百話中往往形而上の問題に涉るものあり。然れども科學的研究の結果にあらず。先生は結局常識の人なり、實踐の人なり。博大なる思想家にして精深なる考究家にあらず、大膽なる論辯家にして懷疑の批評家にあらず。唯其の四十年間一貫の行徑を辿りて世の風濤に蕩搖せられず、誠實に社會を薰陶し、諄々として倦まず、言行一致、平易の言を立て、人々行ふを得る道を宣べ、自ら善くし、兼ねて人を善くせる、其の大功誰か先生に比すべき者あらん。眞に常識の巨人、平民の典型なり。獨立自尊の四字は先生の躬行によつて社會に現示せられたり。先生の書は以て先生を評するに足ら

ずして、唯其の行實を研究して始めて能く其の教育を會得すべし。今や此の巨人を失へり。明治社會の損失これより大いなるはなし。吾人公に於ては平民の典型を奪はれたるを惜み、私に於ては敬慕する巨人を失へるを悲しむ。

(福澤先生哀悼錄)

高山樗牛

名ハ林次郎

評論家

文學博士

明治三十五年歿

年三十二

二五 死と永生

高山 樗牛

死は生きとし生けるものゝ免るべからざる運命なり。夫唯免るべからざる運命なり、故に又避くべからざる問題なり。されど生を惜む人はあれども死を惜む人は少く、生について慮る人はあれども死について考ふる人は稀なり。

訝しからずや。

如何にして生くべきか。是、人生の大いなる疑問なり。然れども如何にして死すべきかは更に大いなる疑問にはあらざるか。吾等は歴史を讀みて大いなる宗教の起るを見たり。されど宗教とは生きんがための教にあらずして、死せんが爲の悟なり。釋迦は人生の四苦に感じて解脱の途を説きぬ。耶蘇は同胞の宿罪を贖うて永生の道を開きぬ。解脱や、永生や、死を外にして何の意義かある。最も賢き人の説ける哲學の旨趣も亦これに外ならざるなり。天地人生の理法を明かにするは、人をして安心立命の地を得しむるにあり。安心立命とは所詮は死を安からしむるの謂に

四苦
生老死病

あらずや。道德は現世の爲にのみ存するものにあらず、名譽の不朽を思ひ、事業の永遠を言はゞ、これ即ち死後の世界を言ふなり。あはれ其の生を見て其の死を見ざる者は人生の根本を遺れたるなり。死はすべての物の終にして、又すべての物の始なればなり。されば人々死を考へよ。死を考ふるは即ち人生の目的を考ふるなり。死滅を考ふるにあらずして永生を考ふるなり。夫の死生の優劣を争ひ、人生の價値を疑ふものは愚なるかな。吾等は生を知る、未だ死を知らず、如何ぞ其の優劣を知らんや。人生の價値は絶対なり、他に比すべきものなし。厭世と謂ひ樂天と謂ふ、吾等其の何の意なるを知らず、吾等は唯人生の實在せるを

知るのみ。

されば吾等は生きざるべからず。永遠に生きざるべからず。死は萬物の運命なり、されど吾等は死を超絶して其の永生を續けざるべからず。如何にせば死して生くるを得んか。人生究竟の問題茲に集る。

世に神に禱りて永生を求むるものあり、佛に願ふものは人生の倏忽を歎きて涅槃の寂寞を求む。されど形體を離れて魂魄なきを如何にすべき。其の墳墓を壮大にし、金を鏤め、石に刻して名の後世に傳はらんことを求むるものあり。されど時はすべての物の破壊者なり。風雨幾歲時移り人渝り、桑滄幾度か變轉して、墓標獨り全きを得べしや否や。

かくの如きは永生の道にあらざるなり。

まことの永生は名によりて生くるにあらずして事によりて生くるなり。儒教の存せるところ、今なほ孔子あらざるはなく、佛寺の建てるるところ、到る處に釋迦あり、耶蘇は十字架にかゝれりと雖も、今なほ基督教徒の命なり。楠公の史蹟に感激する者の胸には楠公其の人の生命あり、蒸氣機關の動くところにはワットの血液あり、電氣の線のかゝるところは即ちフランクリンが永生の地にあらずや。まことの永生は時と共に深さを加へ、人と共に廣さを加ふ。されば一人の精神は千萬人の生命となり、河より海に、海より陸に、蕩々汨々として遂に世界を動かさずんば已まざるべし。

ワット

英人

(1763—1819)

フランクリン

米人

(1706—1790)

十九世紀の文明はかくの如き幾多永生の結果に外ならざるなり。

我が少年諸子よ、諸子は曾て死を考へしことありや。其の年の弱きを以て早しとするなかれ。死を思はずして生くるは空しく生くるなり。其の死をして憾なからしめんと欲せずして獨り其の生の完からんを望むは、是、目的なくして道を歩むなり。死を思ふは即ち永世を思ふなり。而して最もよく此の問題を解釋したるものは哲人傑士なり。

(樽牛全集)



Ms. Y. 1000. 1. 1. RA.

広島大学図書
2000302016
